

天竜川の魚や虫たち

橋爪壽門

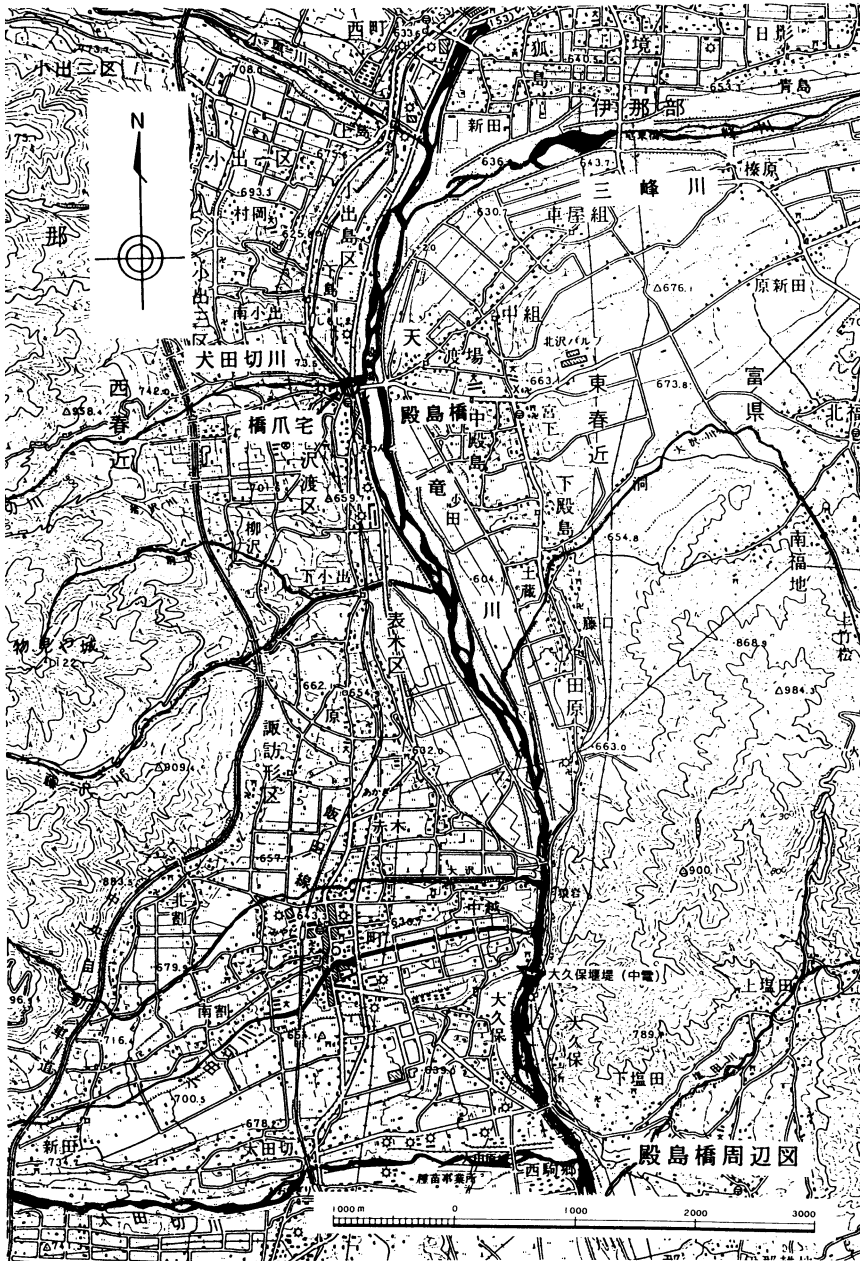
# 天竜川の魚や虫たち

## 目 次

はじめに.....	5
1. スナヤツメ .....	5
2. アユ .....	6
3. イワナ .....	10
4. ヤマメ .....	11
5. ワカサギ .....	14
6. メダカ .....	15
7. ナマズ .....	19
8. アカザ .....	20
9. ゼニタナゴ .....	22
10. タモロコ .....	23
11. カマツカ .....	25
12. アブラハヤ .....	28
13. ウグイ .....	29
14. オイカワ .....	35
15. コイ .....	40
16. フナ .....	43
17. ウナギ .....	46
18. ドジョウ .....	50
19. シマドジョウ .....	54
20. カジカ .....	56
21. ヨシノボリ .....	62
22. ざざむし .....	66
おわりに.....	71

本文図中(静)：静岡県の淡水魚類 板井隆彦

(日)：新日本動物図鑑 北隆館 による。





## 天竜川の魚や虫たち

はじめに

旅人は雲間に光るこの大河

天竜と呼びけんおおいなる名は

夏来(さ)れば信濃路思う天竜の

瀬音聞こゆる故郷の家

これは、従兄加藤享三の歌集から借りた。彼は伊那で生まれ育ち、郵政省勤めから退いて郷里伊那谷の風景に似た奈良の片田舎を終の住み処と定めたという。現役中ほとんど東京・大阪など大都市に住んだ彼の歌集「閑日」の劈頭に「望郷」と題するこの一首があり、後の一首は同じ題で中程に出ている。

どこの同級・同窓会に出ても、挨拶や話題に郷里の山や川の思い出話は欠かせないものになっている。また、最後は校歌斉唱の次にきまって「兎追いし彼の山、小鮒釣りし彼の川」を歌わなければ終りにならない。

さて、私も高校教師を定年退職をした今になって、現職中に満足な授業ができなかったことの反省ばかりである。そこで、今までの補講のような気持ちで筆を執ることにした。天竜川は、水浴び・うろ掴み・川干し・釣りと私たちを守り育ててくれたが、現在は見られなくなった魚種もあり、おぼろげな思い出を頼りに、伊那市近辺(殿島橋付近を中心に)で見られた20余種の魚について綴って見た。私は大正3年生れなので、ここに書いたのは大正10年頃から昭和30年頃までのことが多い。

ところで、私はここ30年ほど(1955年頃から)川と仲違いして、山や里の湖沼・池塘・堤・池・水田などの、ずっと下等でマイクロな生物ばかりを追廻っていて、特に魚を研究したわけでないことをお断りしておく。

### 1. スナヤツメ

このヤツメらは、上下両顎が未分化なため無顎類または円口類として脊椎動物中最下等で、魚類より更に下等な動物とされている。しかし、

普通には最下等魚として扱われることもあるので、魚でない魚としてここにあげた。円口類は一見鰻に似ているが、皮膚に鱗がなく、

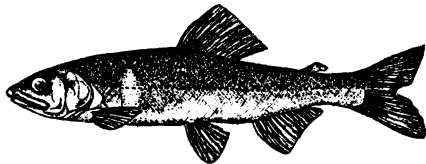


スナヤツメ (静)

背びれ・尻びれ・尾びれがひと続きの垂直びれになっていて、胸びれ・腹びれのような対鰭は無い。骨はすべて軟骨質で、この点は海のサメ・エイなどのような軟骨魚類に似ている。ヤツメの名は、本来の眼の後側方の外鰓7対を加えて八ッ目と見立てたものであろう。書物では、九州南部を除く日本全土、中国・シベリヤなどに分布とある。私は昭和15年頃京都府の由良川の支流で4月末頃産卵のところを見かけたが、伊那ではついぞ見かけなかった。ところが、今次大戦の頃から伊那に姿を現わし、かなりの勢いで繁殖した。そのおかげで、終戦後しばらくの間彼らから蛋白・脂肪源を仰ぐことのできたのは私ばかりではないだろう。書物には「ほとんど利用されない。食用としないが釣り餌になる。焼いて食べると香ばしく、小児のむし薬に用いる。」などと出ている。敗戦の混乱から立ち直る頃になると、この魚がいつとはなく姿を消してしまったのもまた不思議である。冷・清水好みの彼らゆえ、川水の汚濁を嫌っていち早く退散したといえればそれまでかも知れぬが、とにかく今の伊那地方では思い出の魚になったようである。

## 2. ア ユ

以前は、ニシン目のマス科に属していたが、20世紀の初めころ新しくアユ科が設けられ、1科1属1種の魚になった。



ア ユ (静)

これは世界中にこの近縁種がない独特の種であることを意味している。口の構造は上下両顎に歯があり、舌にはひだがあり、川底の石に付いた

藻を主食とするのに適している。また生活史も独特で、マスとは勿論ウナギとも違う。稚アユが海から川を遡って、成魚の期間を川ですごす点ではウナギに似ているが、産卵に川を下っても河口近くの淡水中で産卵する点ではむしろサケ・マスに近い。“すみわけ”や、“縄張り”もアユの著しい生態的特長である。

異種の動物間に見られる競争回避のための適応現象とされている“すみわけ”は、魚ではアユが震源のようである。

天竜川の場合、最上流といえば諏訪湖は別として、すべての支流の源流に最も近いところにイワナが棲み、イワナも棲めない限界点は“魚止め”という高い滝か、滝に近いほどの急流になっている。その下流部はヤマメ（アメノウオ）の棲み場になっている。両者の境界はいろいろの状況によって可動的で、特にアユの移動につれて大きく移動する。すなわち、秋の末になって中流域にアユがいなくなると、ヤマメの三年魚位以上の大部分はアユの棲み場であった中流域に下り、当歳魚や二年魚もかなり下降してその後へイワナが下ってくる。夏になれば、また前のようなすみわけ配置に戻る。上流にイワナが棲まない川では、“魚止め”までヤマメが棲み、逆に上流域下流部にヤマメがいなければ、イワナはかなり下流部にまで見られるという。前者の例では、伊那付近では支流のことを山沢と呼ぶが、そのまた支流にはイワナの棲まない川もある。また段丘崖の下を“寄せ”と呼ぶが、この湧水が源流になっている川も前者の例になろうか。後者の例は思い当たらない。

夏冬ともこのすみわけは完全に実行されるわけではなく、ヤマメは特に規則違反が多い様に見受けるが、ヤマメの項にゆずることにする。

さて、前述の“すみわけ”を縦とすれば、横にも立体的にもすみわけがみられ、また餌を違えて“食いわけ”などという適応も見られる。ヤマメの好んで棲む上流域の下流部には、アブラハヤやカジカが棲んでいるが、それぞれ瀬脇や川底にうまくすみわけている。アユの夏のすみつき範囲を中流域とすれば、その内の上流部にはウグイ・オイカワ・ヨシ

ノボリ・カマツカ・シマドジョウなどが、下流域にはコイ・フナなどが多くなる。

おおざっぱに見て、天竜川の上伊那の大部分は中流域の上流部に当たるといえよう。したがって、下伊那は中流域の下流部ということになるうか。

日本の河川は地形的に、下流域に相当する部分が少ないといわれる。河口近い流水域およびこれに隣接する極く小範囲が下流域とされ、ボラ・スズキ・ハゼなどが棲んでいる汽水域をいうようである。

さて、魚ではアユに特有の“なわばり”に入る前に、アユの生い立ちにふれると、9～10月頃下流域との境界付近まで流れに乗って下った親アユが、浅瀬の砂礫に産みつけた卵から始まる。産卵と殆ど同時に受精した卵は2週間余で孵化し、まだ卵黄嚢を抱えた稚アユは海に向かって流される。海へ流された稚魚は遊泳力が殆ど無いので、動物性プランクトンの仲間に加わり潮の流れのままになる。だが、他の動物プランクトン同様昼間は底深く沈み、夜間は表層近く浮き上がる昼夜活動が続けながら、よりミクロなプランクトンを食べて成長するという。またプランクトンの遺体やそのかけらは夜間になっても浮上できず、静かに海底に沈むことから、これをマリンスノウ (marine snow、海雪) というが、稚アユはこれらのものをも食べて育つだろうと推測されている。12月から翌年1月頃になると体長は2cm位になり、遊泳力も付いてプランクトンplankton (浮遊生物) からネクトンnecton (遊泳生物) に成長変身した稚アユは自力で沿岸に寄ってきて、かなり大型のコペポダcopepoda (撓脚類) と呼ぶ動物性プランクトンを餌にどんどん成長する。こうして3月下旬頃になると5～6cmになり、この頃から川を遡り始める。6～7月頃になると、かつて親アユの棲んでいた中流域に戻ってきて、先着アユから瀬のうちでも一番良いところを選んで縄張りを作り、いわゆる“居つきアユ”または“瀬アユ”と呼ばれるようになる。

先着アユの占める特等席は、川底が直径50cm以上くらの巨礫が敷



き詰められた、藻類の繁殖にもっとも適したところである。後まわりになるにつれて50cm以下の巨礫や、もっと小さな大礫の混じったところ、更に大礫だけのところで我慢するものもある。つまり、棲み場の良否は川底の礫の大きさに決まる。礫が大きいほど安定が良く、小さいほど水出のとき転がり易い。礫が転がると、繁殖しかけた藻類が剥ぎ取られるからだといわれる。従って、劣等席ほど広く陣取らなければならぬようである。縄張りの広さは普通1㎡だが、その行動圏は2～3㎡といわれている。

動物の縄張りは、本来生殖や摂食の場所確保に、同種固体間の競争緩和や回避のための適応とされている。ところが皮肉にも縄張りにあぶれて、淵や瀬脇の淀みに屯(たむ)ろする“淵アユ”もある。彼らのあるものは縄張り荒らしに出たり、瀬アユが釣り師にかかって空地のできるのを待つものもあるという。後者は微細な浮遊藻類や瀬アユの食いこぼしが流れてくるのを食べているようである。

ここで“友釣り”のことになるが、縄張り荒らしに対する瀬アユの防衛行動をうまく応用したものといえよう。友釣りは共餌を使うので共釣りと書いてもと愚考するが、アユをだますことに変りは無い。私はその共餌ともいえる種アユを飼育管理するズクを惜しんでか、“アユ掛け”はしたことが無い。しかし、成熟アユを蚊鉤に引っ掛けたことは一度だけある。殆どのアユが下ってしまった10月も末の頃、浅い瀨(とろ)の尻が浅瀬に変わりかけた辺りで、蚊鉤を流していたときのことである。婚姻色気味に腹の色が黄褐色になった大きなアユだった。背びれに引っ掛かったためかなりの抵抗はあったが、ゆるい浅瀬だったので何とか釣り上げることができた。戯れにか本気か蚊に挑んだ瞬間、偽物に感付いて吐き出して逃げるとき大きな背びれにひっかかったものか。

また、秋期水出の少ない年には、一部のアユは下流域近くまで下らずに、中流域のかなり上流寄りで産卵することもあるようだ。とすれば、産卵のとき浅瀬の水を跳ね飛ばすほど跳ねるようだが、産卵中にひっか

かったのかも知れない。

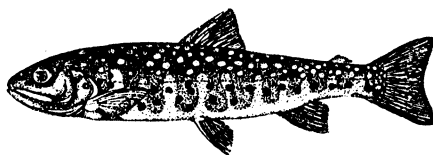
稚アユのうち昆虫を捕食するので、放流後しばらくの間は蚊鉤釣りが禁止されているのご存知のことと思う。

昭和18年頃のこと、生徒の案内で数人の職員と門島ダム下へ稚アユ釣りに行ったことがある。6月末頃だったと思うが、7～8cm から10cm 近くに成長した稚アユがダムの下流にひしめいていて、はだしの足がくすぐりたいほどだった。普通の蚊鉤釣りは朝夕だけのものだが、日中でも曇り空の下では面白いように釣れた。しかし、何とその獲物の味が生臭くて、煮ても焼いても食えないという表現ぴったりのものだった。二度とこの釣りに行こうとは思わなかった。

しかし、忘れもしないのはダムによる稚アユ遡上阻止である。ダムの建設には付帯設備として、用水取水設備・放水路などのほか、既得権益保護のための設備、例えば魚道・魚梯などのかかなり専門的な内容まで、学生の頃農業工学という講座で学んだものだった。このダムの魚道は全く申し訳的なものであるため、稚アユが全然遡上できずにダム下でひしめいているのを眼の当りにしたことだった。今日では採捕稚アユが放流されるようになって、一応難問は解決したように見えるが、深く考えさせられる問題ではある。単にダムや林道だけでなく、すべての開発建設を通じて、自然破壊にならないようにその衝に当たるものはもちろん、世間一般が一層関心を深めてほしいものである。

### 3. イワナ

ニシン目のサケ科に属し、かつてはサケ・マスと同様産卵のために海水と淡水の間を往復する“通し回遊魚”



イワナ (静)

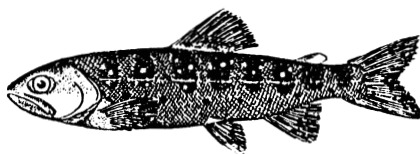
だったアメマスという魚が回遊なくなり、いわゆる陸封型になったといわれる。陸封の原因にはいろいろあるが、中・下流域の水温が高すぎたり、降海前に生殖腺が成熟したりなどがあげられている（最初にあげ

たスナヤツメも陸封型とされている)。奈良県熊野川を南限とし、本州中部・北部・樺太・千島に分布する。日本の淡水魚中もっとも冷たい水を好み、上流域のうちでもヤマメの上流部に棲むことは既に述べた。北方に棲むものは、秋冬期に海へ下るといふ。産卵は他のサケ科のヤマメなどと同様に、秋季に瀬尻近くの直径が数センチ程度の中礫のすき間や表面に生みつける。貧食でムカデ・ヤスデなどの多足類や昆虫類ときには小魚を共食いするようである。イワナは釣り師にとって好獲物だが、私は数回の経験しかない。貧しい経験からしても、ヤマメに比べると釣りの醍醐味も食味も共に大味ということになるだろうか。ヤマメは一つの淵で何匹も釣ることはむづかしいが、イワナはそうむづかしいことではない。

奥多摩方面を主な漁場として現在も溪流釣に憂身をやっている末弟の説によれば、「両者間のI.Q.に差異があるのではなく、両者の生息環境の差異によるものだ。釣り師におびやかされる率の差で、寄り付きのよい場所のイワナは所謂すれていて釣りにくく、逆の場所ではヤマメでも釣りやすい」というのである。

#### 4. ヤマメ

伊那地方でアメノウオと呼ぶこの魚は、サケ科のサケ・ベニマス・ビワマス・



ヤマメ (日)

サクラマスなどのサケ属の一員で、サクラマスの陸封型や降海型の幼魚ということになっている。本州の箱根以東・以北の太平洋岸・箱根以西・以南の山間部・日本海側の全域に分布するという。北方に行くほど降海型が多くなるといわれるが、伊那などの山間部では陸封型のみである。

体型はイワナに比較するとやや扁平で幅広である。体側に黒っぽい小判状の斑紋 8 個を並べているのが特長である。琵琶湖及び周辺・箱根以西の太平洋岸・四国九州の東岸には、これとよく似たビワマスというものがいる。魚自体が酷似している上に、地方によってこれをアマゴまた

はアメノウオと呼ぶこともあってか、この両種は混同されやすく最近まで同一種と見られていた。私はこのアマゴをよく知らないが、図を見たところではアマゴは黒斑が背側よりに並んでいるのと、また体側に紅い点が散在するなど、アメノウオと区別できそうである。最近になって『長野県魚貝図鑑』（中村一雄編、信濃毎日新聞社発行）の写真で見て、私の子供の頃の記憶を呼びさますものは、アマゴではなくてアメノウオ（ヤマメ）の方である。もし私の記憶が誤りでなければ、大正年代には犬田切川や使い川に、ヤマメが天然分布していたのかもしれない。生物クラブ員だった昔の教え子たちの話によると、伊那近辺ではアマゴが多いようである。中村一雄先生のお話でも伊那はアマゴ域になっているそうなので、彼らは『長野県魚貝図鑑』で勉強したものと思うが、それにしてもこのような良書のあるのに気付かずにて惜しいことをしました。その後末弟の誘いで30年ぶりの釣りに犬田切川上流へ行行ったときの獲物にはアマゴらしき朱点の目立つものが多かった。

沢渡では道巾を広めるために川へ蓋をする工事をしたことがあったが、この川は犬田切川からの取り入れ用水路で、私の子供の頃は使い川と呼び、生活水のすべてに当てていた。この川のつららが解ける頃、川端の淀みには2cm足らずで目玉だけ大きいアメノウオの稚魚がちょろちょろと流れに抗して懸命に泳いでいるのをよくみかけた。これは昨秋犬田切川で生まれたものが流されてきたのか、あるいは使い川で生まれたのかもしれない。使い川の井濑いは4月頃だったと思うが、2年魚・3年魚ほどのかなり大きいものまでよくつかまえた。カジカもいた。

段丘崖を源流とする“寄せ”の川にも、春から夏にかけてかなり狭く浅い源流近くまで上ってきた。また冬季にも20~30cm以上の深ささえあればそこへ上ってきて、バイカモやオランダカラシの陰に潜んでいるのを釣ったこともよくある。寄せの川は水温が他と比べて夏は低く冬は高いのが彼らにとって魅力であろう。

アユのところで述べた“すみわけ”には、ヤマメに規則違反が多く、

冬でも山から下らないものや、夏になっても山へ遡上しないものもある。夏になっても溪流へ上らぬ強情なヤマメも、アユとは餌で食い分けているし、淵アユとも瀬脇・瀬尻・淵などのどこかで何らかの形で軋轢を避けているに違いない。しかし、強情な彼らも産卵のためには、秋までに支流へ遡るだろうがそれは確かめていない。ひょっとして寄せ際の深みのオランダガラシやバイカモなどに産みつけるのだろうか。

私は雪を踏んで犬田切川のかなり奥まで入って、3年魚・4年魚と思われるヤマメを釣ったことがある。もちろん獲物は秋の生殖によるやせ細りから回復していない“猫またぎ”と呼ばれる代物ではあった。

秋季、生殖を終えた普通の親魚は、やせ衰えてふらふらと流されるように中流域の天竜川に下る。前述の使い川を下るものもよく見かけたものだ。これらは流れのゆるい深い淵で越冬するようである。

溪流釣りの楽しみは獲物以外に多く、特に冬は格別だった。雪深いあるとき、周囲が凍りつめてわずかに川面の見える淵で糸を垂れていたときのことである。一段上の大きな淵へオシドリの夫婦が舞い降り、頭を揃えて数回遊ぎ回って飛び去った。えんおうの衾をかいま見たというよりか、その美しさは天女の舞もかくやとしばし夢心地であった。

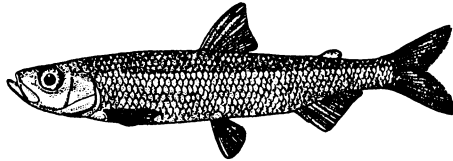
夏の天竜川でも雑魚の蚊鉤や餌釣りの仕掛けにヤマメの大物がきて、うまく釣り上げたり糸を切られたりした。ある時のこと、来客を伴って蚊鉤を流していたところ、大物がとびつき竿先の抜けたのが幸いして、客の助けで仕止めたこともある。先のない竿を客に託した私は、水中深く駆け込み、ぴょこぴょこ躍る穂先を掴まえて、客のさし出す竿先へ挿し込んで、もののみごとに釣り上げた。あわせたとき穂先が抜けたおかげで、雑魚用の蚊鉤がたすかったのである。

3月下旬から4月一杯ぐらいは天竜川も風が強くて寒い、大物釣りはやはりこの頃である。生殖による衰えからかなり回復して、色つやも良くなっている。穏やかな日を選んで、長い竿に少々重い錘を付けて、アユ掛け針で沈床際の底近くをゆるく流すことを繰り返すのである。

餌にはカジカの卵やスズコが最高といわれるが、私はシマミズでよく釣った。餌とりが大変だが、ヒラタカゲロウを数匹かためて挿すのもよい。

## 5. ワカサギ

ニシン目キュウリウオ科に属す。最近店先でよく見かけるシシャモはこの科の別属の近縁種で、北海道東



ワカサギ (日)

南の沿岸回遊魚である。市販のシシャモのほとんどが卵を持っているのは、秋期産卵のため大群をなして川を遡ったところを一網打尽にしたものの冷凍・乾燥品のようなものである。

さて、ワカサギは本州・北海道・朝鮮半島北部の汽水域や純淡水域にも繁殖する。昔から霞ヶ浦が有名だが、明治末年には諏訪湖にも移殖された。これが時々流されてか下ってか、天竜川に姿を現わした。私は昭和15～16年頃辰野にいて大量に釣ったことがある。その頃のもの成長も良くて10cm近く、中には二年魚もいてオイカワの成魚ほどにもなっていた。また、西天竜用水路に沢山下ったこともある。

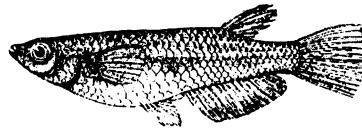
産卵は、早春岸辺の水草や波に洗われた葦の根などに産み付けるといわれる。諏訪湖では、これに注ぐ六斗川・上川などへ早春産卵に上る親魚を四手網ですくって採卵・人工孵化するようである。親魚をすくうところを見たことがあるが、風の冷たい川べりにかがみ込んで大変な仕事である。数分以上も待って数匹が四手網に入るのを見届けては、網を引き上げて生簀へすくい込むのである。諏訪実業高校卒業の某の送ってくれた新聞記事で読むと、最近では川幅一杯に簀(す)を張り、木框・竹框を骨にした糸網の長い釜(うけ)で、遡上する親魚を全部うけとるのである。採卵したものの約半分は霞ヶ浦、北浦、猪苗代湖など全国各地に送られ、残りが諏訪湖に放流されるとのことである。また、諏訪湖が全面結氷すると親魚の遡上成績が良いなどの記事もあった。して見ると、暖冬では湖岸で産卵してしまうのか、それとも卵子形成がよくないのか

などの問題が残る。

前後したが、餌はプランクトン・昆虫などのようで、釣り餌にはサシ（蠅の幼虫）や蚊鉤を用いる。仕掛けは道糸の先端に重い錘を付け、途中へ鉤素（はりす）の短い鉤を7～8個付ける。錘が底に付くまで沈めて、5～10cm静かに上下すると二匹も三匹も競争で飛びついてくる。これは普通ボートや泥船で沖合へ出たことである。したがって、釣れた獲物はずしたり餌をつけかえたり、また仕掛けが仕掛けだけに絡み合いやすく、これをほぐすことが一仕事になる。しかし、慣れるとこの仕掛で二本の竿を両手で巧みに操って、沢山釣れるようになる。

## 6. メダカ

メダカ目メダカ科に属し、北海道を除く日本のほとんど全土と、アジア大陸の東部に分布する。小型で適応性が強いので、



メダカ（静）

平地の浅い池沼をはじめ、河川流域の停滞水・細流・水田やこれらにつながる狭小な水域にまで棲むとされている。実際、大正の半ば頃からの記憶では、前記のようにどこにでも見られ、ふつう数匹ぐらいつつ、時には10匹20匹が群れているのもよくみかけた。昭和に入ってから段々に減少しはじめたが、15年頃までは家の自家用鯉池にも沢山いたのを覚えている。

昭和40年頃、父が残した枯れ山水風の池に手を加えて水を入れ、金魚やメダカを飼うことにした。金魚は早速店から買ってきて放すことができたが、メダカを手に入れるのには苦労した。方々探し歩いた末、天竜川の下島堤防際の停滞水で、辛うじてわずか数匹を見つけて池に放すことができた。しばらくはメダカの健在確認が日課の一つだったが、ある日突然水道水のクロールカルキの濃度が上がって、金魚までほとんど全滅してしまった。その後は金魚は店で買えても、メダカは何回か探し歩いたが見付けることはできなかった。

さて言海でみると、「長さ一寸ばかり、首平たく、目大きくして高く出づ。性好みて水面に群遊す。諸国、名を異にす。メメザコ、ウキンジョ、ウキタ、ウキイヲ、ウキウヲ、ウキング、ウキス」とある。

和名のメダカ（目高）は、前記の形態的特長から、また方言のメメザコは体が小さいことから、他の方言はすべて「水面群遊」の習性からその名が付いたものであろう。最も短い方言のメは前者に、ウキは後者に類しよう。なお、メダカの方言は 2,000 を越えるという。

ここで学名 *Oryzias latipes* (T.et S.) に愚考を加えさせていただくと、*Oryzias* は米（粒）のような、*latipes* は *lati* = 広い、と *pes* = 足・足状部との合成と考えられる。したがって「体は米粒ほど小さいくせにヒレばかり大きい」とみて、シュレーゲル等は命名したものか。

それはさておき、メダカは初期発生を観察材料となり、また本種の飼育品種ヒメダカは限性遺伝の教材に使われるが、肝心の雌雄鑑別がむずかしい。雄は雌に比べて尻鰭の鰭が長いことと、背鰭の後方部の鰭条が鋸歯状になっている。この二点だがなかなか見分けにくい。産卵期は 4 月～10 月とされているが、この辺では 5～7 月頃が最適期で、産卵受精後の卵塊の一部を肛門部に付けたまま遊泳しているものは紛れもなく雌である。これと前記二点の特長を具えた雄と比べてみるとよい。

メダカの近縁種カダヤシ（蚊絶やし、クロメダカ）は原名のタップミノの方が知られていようか。テキサス原産で蚊の駆除用として各国へ輸出され、日本でも東京ではかなり繁殖したようである。低温に弱い。雌に比して雄は極めて小さく、尻びれが棒状に変形して交尾器になっており、雌雄鑑別はやさしい。

別の近縁種グッピー（guppy）は、研究社の辞書には「西印度地方原産で、英国の科学者の名前を貰った」としてある。鑑賞用として日本へも輸入されたが、これも低温には弱く、北信地方の温泉地の排水溝などで野性化して相当に繁殖したことがある。その後どうなっているかはよく知らない。グッピーは卵胎性で、繁殖力も旺盛なところから、ミリオ



ンフィッシュ (million fish、百万魚)とも呼ばれる。また複雑な色の美しさからレインボウフィッシュ (rainbow fish、虹魚)ともいわれている。(ここで、性染色体上の遺伝子による遺伝をすべて広義の伴性遺伝と呼ぶこと。その遺伝子がXY型生物ではX染色体だけに、またZW型生物ではZ染色体だけに座位していて遺伝する場合を狭義の伴性遺伝と呼ぶこと。さらにまた広義の伴性遺伝の中に、もう一つ限性遺伝があることを想起して下さい。)

生物の教科書には学名の*Lebistes reticulatus*からレビステスの名が使われているものもあるが、雄は特に美しく、背鰭に生ずる黒斑は限性遺伝のうち限雄性遺伝をする。

一般に魚類の性染色体は雌XX雄XYだが、背鰭の黒斑遺伝子はY染色体だけにあるため、黒斑はつねに雄だけに現われ、正真正銘の限雄性遺伝をする。したがって、メダカのように雌雄鑑別に苦労することはない。

雌雄鑑別のことの序に、蚕に脱線することをお許し願いたい。蚕の種卵をとる蚕種製造には、親の雌雄鑑別が大仕事になる。また、鑑別期が上簇間際の熟蚕期に限られている。そこで京都府綾部の蚕業試験場では、X線照射で常染色体上の虎蚕の模様の遺伝子を、姫(ひめ)蚕(背中に模様がない)の雌のW染色体上に転座させて、雌雄鑑別が誰でも何時でも、容易にできる新品種を作り出した。この珍品種に「綾部系限性虎蚕」の名が付けられたが、これは正真正銘の限雌性遺伝で雌だけが虎蚕になり、雄は全部背中に模様のない姫蚕になる。(昭和55年頃の新聞記事より要約)

ところで、緋メダカの体色の遺伝も限性遺伝と呼ばれているが、グッピーとは大きく異なり、限性遺伝と呼ぶにはかなりの無理がある。これは体色を表わす遺伝子がX、Y両方の性染色体上に座位していて、緋(ひ)因子が優性で白因子は劣性であることに起因している。仮にもし、白の劣性遺伝子が両親の緋メダカに潜在していれば、その子メダカ

(F1) の雌か雄のどちらかは、低率ながら白く生れる可能性がある。

性比すなわち雌と雄の個体数比が同率とすれば（例外を除けばほぼ同率）、この場合に白の出る割合は雌雄同率になるはずである。したがって、この場合は手放しでは限雄性遺伝とも、限雌性遺伝とも呼ぶことは出来ない。しいて言えば、白の雌に純粹の緋の雄を交配すると、第2代目（F2）になってから孫雌だけの半数が白くなり（セミ限雌性とでも）、また純粹の緋の雌に白の雄を交配すると、第2代目（F2）になってから孫雄だけの半数が白になる（セミ限雄性とでも）。したがってこの場合だけに限れば、半限性遺伝といえなくもないが、余り感心したことではない。もともと限性の名は欧米で言う sex-limited の直訳と考えられ、また遺伝結果が一方的なとする one-sided の名もある。

私はXY型生物ではその遺伝子がY染色体だけに、またZW型の生物ではW染色体だけに座位する場合に限って、限性遺伝と呼ぶべきではないかと思う。念のためもう一度岩波の生物学辞典第2版を見直したところ、私がセミ限性とでもとしたところを不完全伴性遺伝としてあるのを見落としていましたがこれでご納得いただけます。

さて、昭和26年の歌のおばさんから広まった「めだかの学校」は、知らぬ者がないほど多くの人達に親しまれてきた。曲は言うまでもないが、特に3番の歌詞の「水に流れてつーいつい、みんながそろってつーいつい」などはこれだけで今は幻のメダカが彼を知る者には彷彿と甦ってくると思う。しかし、この歌が歌われ出した頃でさえ、メダカを知っている生徒は少なかったように思う。今日ではほとんどの子供はもちろん、親たちでさえ知らぬばかりか、多くの人達がウグイやオイカワなどの稚魚と混同しているのは残念なことである。

最後に、メダカは温度変化、塩分濃度、有機汚濁などに比較的強く、小池や水槽飼育にも耐え易いので、また飼育中に縄張り行動や順位性が見られることがあり、これらの観察材料としてももう一度戻ってきてほしい魚である。

## 7. ナマズ

鯉目ナマズ科に属し、日本全国およびアジア大陸東部に広く分布する。『言海』では、



ナマズ (日)

「なまず、滑らかなる意、頭大きく、額扁く、口大きくして鬚あり、腹大きく、下体狭くして尾に岐なし、全身扁くして鱗なく、はなはだ粘滑なり。流水の産は背蒼黒にして美味なり。止水の産は背黄を帯びて味劣る。また赤鯰あり。」と出ておりナマズの名は甚だ粘滑なところから来ているようである。

学名 = *Silurus asotus* L. の *Silurus* は *silus* が反り鼻の、*urus* は野牛・野獣、*asotus* は美食家・浪費者・道楽者----などから推測するに、リンネは反り鼻獣のような顔の、のらりくらりとした大食漢とでも見立てたのであろうか。東京近辺にはチンコロという方言があるようだが、愛玩犬の狆(チン)を連想したものか。

さて形態的な特徴として、上顎に長い口鬚が一对、下顎には短い一对がある。また、胸ビレの前端というべきか上端というべきところに太くて頑丈な刺があるが、あやまって血の出るほどに刺されても毒はない。

ナマズ属で日本にはビワコオオナマズとイワトコナマズの2種が知られている。前者は名のように琵琶湖の特産種で、数十m以深の沖合で漁獲されるという。大きいことでは1m余に及ぶが、大ナマズなるが故か、味は大味だといわれる。後者は岩床ナマズの意で、岩礁のまわりに好んで棲むといわれる。これも琵琶湖およびこれに隣接の余呉湖のみに産し、味は最高とされ値段も他の3倍もするそうである。全国的に見られる普通のナマズは特に他のナマズと区別するために、マナマズと呼ばれだしたようだが、ナマズで十分のように思う。

この辺ではザルやセセリをあてがって、魚の潜んでいる水草などをざぶざぶ踏み鳴らして魚を追い込んで取る漁法を“魚踏み”といった。漁具のセセリの名はこのような漁法から来たものであろうか。子供の頃は

よく寄せの小川や、河原の井筋へ魚踏みに行くと、天竜川のいろいろな魚の仔がとれたが、時々オタマジャクしより少し大きいくらいの仔ナマズがとれた。今になって調べて見ると、琵琶湖や東京近辺の産卵期が5～7月で、1年間で10～15cmに成長するといわれ、伊那近辺での成長はやや遅いを見て孵化後満1年を経過した仔ナマズだったと思う。これがもう1年経つと20～30cmになるというから、4～5年経ったものはかなりの大きさになるものと思われる。子供達が天竜ばたで水浴びに打ち興ずる頃、大井筋では大人の人達が大セセリをあてて、腰までも水に浸って踏んでは何キロもの大ナマズをおかもちにゴショゴショとつかみ込むのを見て、早く大人になりたいなと思ったものである。

戦前辰野町宮木に住んでいた頃、夏休みも終の頃だったろうか、愚妻同道で、行ったこともない新町駅の下流の沈床際で、鯉を狙うつもりのみみず餌に意外にも大ナマズが釣れてきた。早速夕食にはナマズの蒲焼きとしゃれた。ウナギに比べると油気が少なく味はやや淡泊だが、これはこれで一つの持味として賞味できたことを思い出す。『言海』の「背の色は蒼黒」ではなかったが、まさに「流水の産」なればこそとご納得が頂けるかと思う。また同じく『言海』に「赤なまずあり」とあるが、ヒメダカ・ヒゴイ・ヒドジョウのように実在するかと、「赤なまず」を調べてみると、①なまずの色赤きもの、②ぎぎの類、身は茶色にて長さ2～3寸のあり、鱗に刺ありて齧すものとある。赤鯰はギギ科のアカザの間違いであろう。

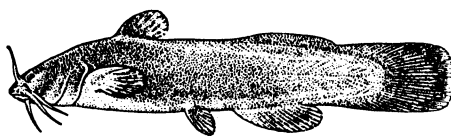
最後に、ナマズの地震予知については学者間でもいろいろ取沙汰されている。実際地電流を鋭敏に感知し、地震の起こる数時間以上前から活動が活発になり、水面に跳びはねたり、水槽から飛び出したりする例も報告されているという。

## 8. アカザ(サスリ)

コイ目ギギ科に属し、本州中部以南、四国・九州に分布し、暖地では上流域下部、天竜川では中流域上部に当たる上伊那の大部分がアカザに

最適な棲息環境と考えられる。

アカザはアカナマズ（中国地方・滋賀）アカノ（滋賀）アカネコ・アカヒツ（関西）チカラ（山陰）など多くの方



アカザ (日)

言で呼ばれ、伊那ではサスリと呼んでいる。

メダカはその愛らしさから多くの方言をもらい、アカザは人を刺すが故に多くの方言を得たものであろうか。上方に1対、側方に3対、計4対の口ひげがあり、背鰭と胸鰭の前端とにあわせて、3本の刺を持ち、これに刺されると蜂に刺されたほど痛い。

ところで、アカザの名前が『広辞林』にも『言海』にも載っていないのは、比較的近年まで「ナマズの色赤きもの」と「ギギの類」が混同されていたためではなかろうか。『国語大辞典』にはアカザ（赤佐）があり、アカナマズ・ヒナマズの別名もある。ザの音には刺す意もある（言海）。

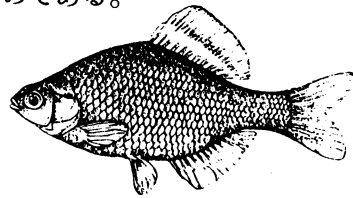
アカザは、半ば砂礫に沈んだ石の下に潜り込んでいて、夜間や濁水時に出ては、比較的大きなカワゲラ・トビケラなどの幼虫を餌にしているようである。産卵期は5～6月というから、ナマズとほぼ同じ頃のようなのである。天竜川の浅瀬で釣り餌をすくっていると、チラカゲロウと一緒にこの稚魚がとれることがあるが、ナマズの稚魚よりずっと小さく、成長度もナマズよりずっと遅いものと考えられる。

産みっぱなしが多い世の中で、アカザは石の裏に産みつけた卵塊を雌親自身が保護するという。カジカでは雌の産んだ卵塊を雄が大きな胸びれで被ってじっと保護しているのはよく見たものである。その魚の習性といえばそれまでだが、いずれにしても感心なことではある。アカザはもともと個体数が少なく、春先から梅雨の頃の水出のときカジカ網や四手網でいわゆる“カジカ踏み”をしていると、カジカやヨシノボリに混じってわずかにとれたくらいである。稀産種的なこの魚なればなおのこ

と、何とかして天竜川へ遣したいものである。

### 9. ゼニタナゴ

コイ目コイ科に属し、関東以北の本州に分布し、水草の多い浅い池沼に棲むとされている。上伊那誌には大正8年



ゼニタナゴ (静)

から何回か諏訪湖へ淡水貝を放流し、これらの貝と共に移殖されたものか、大正の中頃以後天竜川でも見られるようになったが、タナゴ類の放流は昭和6年と記されている。私の記憶では、タナゴ放流以前に見たことはあると思うが、放流以後にも余り多くはとれたことも見たことも思い出さない。

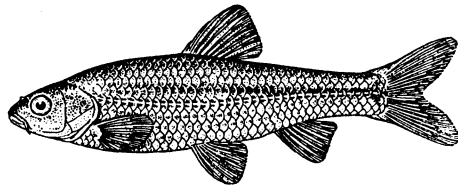
方言のうち、外観だけで呼ばれるヒメダイはとんでもない。食べて見るとニガヤニガブナに落ちてしまうのは当然であろう。和名のゼニタナゴのゼニは、千葉県手賀沼地方の方言ビタ・ニガビタと呼ばれるように、うすっぺらで円いことや、食品的価値が低いなどの意味がこめられているようか。ところが、タナゴの名の由来については、『言海』にもどの書物にもそれらしきものは見当たらない。そこでもう一度『言海』を調べなおしているうちに見つけたのである。タナゴのすぐ右隣に「たなこ(店子)」があったのである。大抵の関係書がタナゴ属として11種を上げているが、そのすべての種が共通して卵から稚魚までの期間を、二枚貝の外套腔内で「店子ずまい」(寄生的・卵胎生)をすることである。すなわち雌親は長い産卵管で卵をドブガイ・タガイなど多くの種類の二枚貝の鰓上腔へ産みつける。雄親の精子は貝の吸水管から鰓に入って受精が行なわれる。対象をゼニタナゴにしぼると、関東地方での産卵最盛期は10月前後とされ、翌年5～6月まで店子生活をするようである。タナゴの名こそ、店子から来たものにちがいないと思う。『国語大辞典』のタナゴの項の語源説にはタヒノコ(鯛之子)・タヒラナゴ(平魚子)の義か、とあるのを見落としてはいたが、これは単に形からの名である。

その店子生活を終る頃の体長は 6mm くらいで、それ以後は自由生活に移り、初めは小型浮遊藻類を食い、やや成長してからは付着藻類を主とする雑食性になるそうである。店子生活中のことについては、孵化後から卵黄ごと蛆（うじ）のように体をくねらせて動く、と書かれた書物があっただけである。したがって、この期間の成長はきわめて遅々としたもので、1か月に 1mm と計算される。雌親からもらったお弁当（卵黄）のほかには、餌らしいものとしては、貝の外套腔内に流れ込むミクロな緑藻や藍藻のかけらか、貝の餌のおこぼれか、または貝の分泌物などのうちの何なのか。この両者の受益関係も手持ちの書物には見当たらないが、面白い問題ではある。

さて最後に、この原稿を見た愚妻の話を加えさせていただく。その名もヒメダイと呼んだそうであるが、西天竜水路の完成した昭和初期の頃のことだそうである。枝水路や水田の水口などに多数群れており、ざるで沢山すくって持ち帰ったそうである。ところが食べる段になったら、苦くてまずくて「煮ても焼いても食えない」とはこのことと、門島の稚あゆと共にまずい思い出になっているそうである。

## 10. タモロコ

コイ目・コイ科・カマツカ亜科に属す。モロコ属はわが国でタモロコ・ホンモロコと、これに近縁な数種が知られている。



タモロコ (目)

天竜川で昔から知られているのは、タモロコだとされている。静岡・新潟以西の本州、四国の愛媛・高知の両県、九州では宮崎・鹿児島を除く全域に分布するといわれる。1939年以後の放流により、関東特に東京近辺では相当に殖えているという。なお最近では移殖によるものかどうか、更に広範な地域から報告されているという。

モロコの名の由来を『言海』で見ると、「もろこばえ（諸子ばえ）の

略で子の多い意。また近江の坂本なる諸子川・森越川・朽木その他湖辺に多し。」とあり、産地名からとも見られる。方言に関しては、琵琶湖を除く多くの地方でただモロコと呼び、大阪ではスジモロコ、静岡方面ではカキバヤ、中国地方ではミゾバエと呼ぶようである。ミゾバエ（ミゾバヤの転）の名は、流れの緩やかな砂や泥底の溝川によく適応していることからであろう。同属のホンモロコは琵琶湖の特産種で、いつの頃から諏訪湖・山中湖・関東方面へ移殖されたという。しかし、その頃から諏訪湖での漁獲量は少なく、天竜川へもあまり下らなかったようである。

魚類の分類同定には、近頃その名称は使わぬが、鱗式・ひれ式などの方法がよく使われる。例えば鱗式の一つには、背腹の中間を通る側線（水圧を感じずる感覚器が並んでいる）に沿って鱗数を数える、側線鱗数という方法がある。つまり、鱗が幾縦列あるかを数えるのである。生徒とクラブ活動でやったこともあるが、戦後すでにモロコはたやすく手に入らなかったように思う。タモロコとホンモロコの区別は書物によりいろいろだが、タモロコが35～39の枠内で、40以上はない。これに対しホンモロコでは、40～43となつてかなり明確な区別点になる。

味では琵琶湖産のホンモロコの方が日本産コイ科魚類中最高とされ、タモロコの方はこれに遠く及ばないといわれる。伊那の辺ではタモロコをモロッコと呼ぶ者が多く、モロウとかモロと呼ぶ者もいた。

幼い頃、寄せの小川での魚踏みの記憶では、メダカ・ドジョウ・フナとモロッコ・アブラッパヤなどが主な獲物だった。前者は川底に泥が溜るほどの緩い流れのところが多かった。後者のうちアブラッパヤは、使った川の枝川の尻が流れ込んで川底が洗われた細礫のところや、寄せの清水が混じって水も冷たく川底もきれいなところにいた。こんなところは、春先の雨上りには、ヤマメの1～2才魚が遡上してきていて、ざるに入って驚かされたこともあった。モロッコはこの両水域の中間域に多かった。といっても、これは何kmもの範囲ではなくほんの数10mの小範囲のうちにもこのようにいろいろな水域があつて、それぞれ思い思いに棲み分

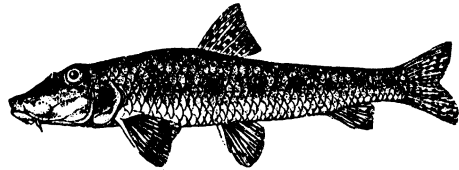


けていた。

小学校へ入学した頃近所の上級生たちに混じって、殿島のどぶでモロッコを浮釣りしたのが釣りの最初だった。魚影を見ないで釣る浮釣りは、濁りの澄むのに手間取る三峰川の水をためた殿島のどぶでは自ずとこの釣り方になったようだ。その頃はミミズを小さくちぎって餌にした。もともと小魚であるため量ははかどらなかった。「瓶伏せ」も上級生たちから見習った。米糠を炒って香ばしくした餌を透明なガラス製の瓶釜に入れて、淀んだ川底に沈めておくと、これに一番よく這入るのがモロッコだった。しかし、稚魚保護のためか、瓶釜が危険物であることからか、まもなく禁止された。

### 11. カマツカ

コイ目・コイ科・カマツカ亜科カマツカ属に属す。体は円筒形で頭部は尖り、ハゼ・キスなどに似ている。口角には一対の口鬚があり、体の背側は淡黄褐色を帯び、腹側は白い。側線に沿って暗褐色斑が散在する。



カマツカ (静)

名の由来は、捕まえたとき鎌の柄を握ったような感じを受ける。いかにも感覚の鈍そうな、また体の固さがよく言い当てられていると思う。高知の方言アサガラ(麻幹)も、体の固さと鈍感をよく表わしている。全国的にスナホリ・スナクヅリなどの別名があるのは、彼が典型的な底棲魚で、砂礫底に静止または砂中にもぐり、底棲の餌をあさるところからであろう。多摩川のスナムグリもこれに類するものといえよう。伊那近辺では、ズコンボウとかズコウと呼んでいたが、この由来についてアテズボウ(当て推量)を言えば、ズコンボウはスゴンボウ(酢牛蒡)の訛りではなかろうか。皮をこそげて酢で調理した酢牛蒡は形や色合からも、その着想はカマツカ同様のやそれ以上の旨味がある。したがっ

て、ズコウの名は多分スゴンボウから訛ったものであろう。

さて、「火追い」という漁法は手持ちの書物には見当たらないが、父がこう呼んでいたからにはこの辺の呼び名だったのであろう。夏が来ると、父は昼休みもそこそこに「夜網」のための投網のつくろいや「火追い」の準備に余念がなかった。松の根っこの脂気の多い材を焚くあかし（灯火）で、魚を追い漁ることから「火追い」の名になったのだろうか。伊那の辺ではあかしに使う燃料（赤松などの樹脂を特別多く含んだ材の部分）のことをあかしと呼んだ。父は水車屋の屋根裏に取り溜めてあるこのあかしを、手斧で丹念に細く割って小びくに詰めた。いつ頃作り、いつ使ったのか太い針金を曲げて作った、あかしを焚くための手製の道具も黒々と煤けていた。

風もなくゆだるように蒸し暑い夜は、伊那の辺りでは夏中にあるか無いかというほどだ。私が小学校低学年の頃、父はこのような夜を予測していたかのように「さあ、火追いに行くぞ。」と私を従えて出かけた。私は灯火をかざしたり、引っ込めたりする照明係兼捕獲係で、父は監督兼捕獲主任だった。父の話では、魚も夜は眠り、特に蒸し暑い静かな夜ほど眠りが深い、とのことであった。魚の種類によっても異なり、夜網でも漁の難しいアユや、コイ・ウナギ・ナマズなどの夜釣りのできるものは、眠りが浅いか少ないかの証拠とも考えられる。他は大同小異だろうが、ただズコウだけは熟睡型として特筆すべきであろう。ズコウことカマツカこそ、火追いの目玉獲物なのである。普通にはウグイ・オイカワが狙われた。昼間の動きに比べるとずっと緩く鈍いので、静かにこれを追って行くうちに動きの止まる時がある。この時こそ魚の熟睡状態だろうか。これにたも網をそっと被せて上から軽く押えるように掴むのである。滅多には行き当たらないが、底が細礫や粗砂まじりのところは、流れも緩く波も少ないので、底に張り付くようにして眠りほうけているズコウは探しやすかった。またこれを見つけたら、捕まえたも同然だった。たも網なしの素手でも、上から軽く押えるようにして捕まえられるので

ある。この捕まえた感じこそ全くの鎌柄であり、酢牛蒡なのである。ビクに放り込まれて暫くしてからようやく目が覚めたかのように跳ねくり出すのである。父との火追いは二度ほど大漁だったが、その後は、父の都合か、好条件の日がなかったか行つた覚えが無い。

小学校 4年頃のことである。一年上の商家の一人息子を相棒に夜っぴて名のとおり追い歩いた時の後日譚は、彼と一緒に酒になるとお決りのように始まるのである。彼の家では家中のものが待ちくたびれて、故意に嚴重な戸締まりをして寝てしまい、完全に締出されてしまった。途方に暮れた彼は思案の末に隣家との隙間にもぐり、板壁をよじ登って、二階から午前様を決めこんだ。翌日は両親やら大勢の姉たちから次々とお説教を受けて散々だった。お前との魚とりはこりごりで、金輪際やらぬことにした....というのである。私の方はお説教をあまり受けなかったのか、受けたのを忘れたか、とにかく遅くまで追い歩いたことと、獲物の少なかったことだけは覚えている。夏とはいえ蒸し暑いどころか、風も冷たくうす寒い夜だった。

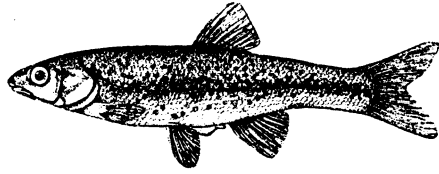
私がずっと幼い頃、父はよく「どぶ釣り」という釣り方で、ズコウ・アカウオ・ナマズなどを大量に釣ってきた。父の指の太ささほどの手製の釣り竿を10本も20本も束にしてかつぎ、大漁の獲物をさも得意げに提げて帰ったことを想い出す。ずっと以後になっての話では、重いおもりのしかけの竿を何本も川べりに挿しておいて、次々と見回って釣りあげの方法で、醍醐味に乏しそうな気がした。それにしても一度やって見たいと思ひながら、つい実行までには行かなかった。しかし、父の手作りの竿は幾束か残っていて、私や弟たちや子供達にまで段々使われて、家屋を改築する時までわずかにその名残を留めていた。

六道の原の大根(だいこ)も食いじまい

これは父の辞世の句となった。肝臓癌を患った父が逝ったのは、大東亜戦争の最中で、六道原へ飛行場が造られている時だった。

## 12. アブラハヤ

コイ目・ウグイ亜科・ア  
ブラハヤ属に属す。



アブラハヤ (静)

岐阜のアブラモロコなどがあるように、体表があぶらけ(油気)でぬらぬらす点はコイ科中最高といえようか。

ハヤはウグイ・オイカワ・ヒガイ・モツゴなどの方言にあるように、動きが速いところからきたものか。実のところオイカワなどはあまり速いとはいえないが、アブラハヤは物陰から陰へすばやく行動する。体型は天竜川によく見られるウグイに似ていて、腹部を除く全面に散在する黒褐色の斑点は、この種の特長である。北海道を除く日本のほとんど全土の、山間に近い冷水域に広く分布するという。イワナ・ヤマメなどの溪流魚に次いで高濃度の酸素を必要とする魚といえようか。

私が小学校入学の頃、下島から唐の木へ、今の国道沿いに7~8 m幅の川が流れており、私たちは清水ッ川と呼んでいた。戸沢川や、小戸沢川の山沢の水や、途中の段丘崖から湧く清水を集めて流れた川で、名の通り水のきれいな川だった。もちろん、三峰川洪水の直撃による下島堤防の大欠壊・大氾濫以前のことである。その頃でも増水の度に天竜のいろいろな魚が遡上してきて、ここを安住の地と定めて一番よく住み着いたのはアブラハヤだったように思う。冬の寒気の中では、清水ッ川はいつも湯気を立てていた。水もぬるみエンノコが咲き、タイワンゼリ(オランダガラシ)の青味(緑色)が増し、川面から立ち上がる湯気も目立たぬ彼岸頃になると、風の無い穏やかな日には、この川端は唐の木の子供達の楽園だった。彼らは大はしゃぎでケロリに熱中した。ケロリというのは、諏訪湖やその周辺で見掛ける四手網漁のことである。この漁法をこの辺の古老たちが網を揚げた時の感じからこう呼んだものだろうか。網を揚げたとたんに掬った人間も救われぬ魚もケロリとした、実感

の籠った面白い命名ではなかろうか。実際掬われた魚はケロリどころではないのだが。

子供達のケロリは、諏訪湖の四手網の1/10にも満たぬ小型なものだった。これを一人が沈めていて、牛のてっぺんによじ登った監督役の合図ですばやく網を揚げるのだった（牛というのはアカマツ・カラマツなどの丸太材を不等辺三角形に粹組して蛇籠や古俵・古吠などを使って石積して水防・砂防に備えたものである）。他にも大勢が臨機に、監視・情報提供・追い込みに当てられたり当たったりした。ケロリには小鮒・オイカワ・ウグイなども入ったが、アブラハヤが一番安定した獲物になっていたように思う。大鮒や鯉がちょっとでも姿を見せようものなら忽ち大騒ぎになるが、多くは騒ぎ倒れに終わった。同じ年の頃、4～5月になると唐の木の上級生たちの間に挟まってアブラッパヤを釣った。モロッコに比べると2～3倍の大きさであることと、澄んだ水の中で魚の動きを観察しながらの釣りは、一層楽しかった。バイカモ・フサモ・オランダガラシなどの水草や、沈床・蛇籠などに近寄せて釣り餌を沈め、息をとめてじっと水中を見守るのだった。ちらっと魚影を感じた時は既に餌をくわえていて、いわゆる「あわせ」の時だった。6月頃の産卵期が近付くと、あわせに不慣れな私にもよく釣れた。しかし、産卵直前の頃は♀♂とも餌をとらぬことを後に書物で知ったが、魚類に限らず多くの生物の通性なのか。餌にはミミズをちぎって刺した。夏秋の頃になるとミミズにはあまり食欲を示さず、蜂の子で釣ったこともある。

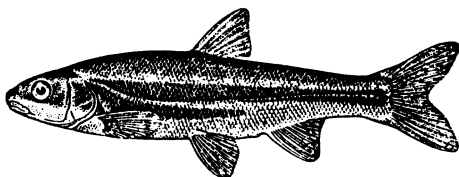
アブラハヤは比較的近年まで高遠方面でも見てきた。他所でも、溪流の下流域の深みには、ひそやかに露命をつないでいることであろうが、昔のようにはびこってほしいものである。

### 13. ウグイ

コイ目コイ科ウグイ亜科ウグイ属に属する。

『言海』には「鵜喰いすなわち鵜の食う鮎とも、淡水に産する魚」とも出ている。一説によると、うぐいは鵜に食われる魚の総称から個有名

詞化したものとも言う。私は後の説に従う。天竜川に限らず、長野県では大抵のところではアカウオと呼んでいた。しかし近年ウグイという正しい



ウグイ (目)

和名がかなり普及してきた。方言のアカウオは、5～6月頃の産卵期に近付いた♂や♀にも鮮やかに生じる三条の朱紅色の婚姻色に由来している。しかも、この赤味の現われるのが早く、生殖後消えるのにさらに長くかかるからである。したがって、色こそ淡くとも、ほとんど一年中というほど腹に赤味を帯びているからなのであろう。方言の由来とは別だが、生殖の時期の♂には頭部やえらに白色の「追い星」を生じる。♀にも現われるが、顕著ではない。追星の名は、♀を追う♂の頭部や背部に白い星を頂く姿からきた素朴な命名と思われる。欧米では追星のことを pearl organ (真珠器) と呼ぶが、少々大きさである。ついでに、婚姻色の方は nuptial coloration の直訳と見られる。さて、他の方言をみると、腹の赤いところからきたアカハラは関東北部から東北地方で、動きが早いとみたハヤ・ホンバヤが東京で使われている。由来に見当のつかぬイダ(四国・九州)、アイソ(栃木)、イゴ(山陰)、クキ(関東)、オオガイ(東北)など多彩である。マルタ(東京)は降海性のこの近縁種が東京湾・松島湾などにおいて、それとの混用と見られているが、御本尊のウグイもオイカワ・カワムツ・ハスなどに比べて体に厚みがあり、マルタ(丸太)の名が付いたのもうなづける。愚妻の昔話によると、北海道の叔父の土産品にはよくウグイの丸干があったという。それはずっと大型で、その名も叔父はオゴイと呼んだ由だが、多分ウグイの訛であろうと思う。ついでに地方的な訛を『国語辞典』でみると、オゴイ(富山・鳥取)、イゴイ(富山)、イグイ・イムイ(岐阜)、ウムイ(静岡)などがある。

分布は北海道から日本のほとんど全土に及び、コイ科中唯一の降海魚

を含んでいる。というのは、淡水のみで一生を過ごす純淡水型のもの、生活史の大部分を海ですごし産卵期のみ川へ遡上するものや、また海と川とを一生のうち何回か往復する回遊型とでもいえるものがあるからである。全くの推測に過ぎないが、これらの習性は固定的なものではなく、海との移動距離や、個体的な年令などの内因的なものもありそうに思える。伊那市付近より上流では淡水型が多いように考えられるが、たまたま7年8年と寿命を保って高齢に達したものは、淡水型に限らず移動距離が拡張されるのではないかと思う。私はウグイの海まで行ってきたかと思うような大物を獲ったことはない。ただ子供の頃、水出の時に父が投網で獲ってきたものに40cm余の大物があって驚いた。子供心に、海から上ってきたのではないかと思った。

ウグイの成長について、1年で8~10cm、2年で10~14cm、3年で16~18cm、4年で18~20cmと出ており、降海するものでは45cmに及ぶものがあると出ている書物もある。したがって、子供の時に見た40cm余のウグイは、この記述から見ても10年近い齢を保ったものと思われる。ひきむしの達人で有名だった市内某医師のおかもちの中に、30cm余の大物が幾つも入っていてさすがと驚いたことがある。このような大物から受ける感じは、どうしても海へ下って箔を付けてきたものに見えてしまう。

サケでは母川回帰ということが詳しく調べられているが、これをヒントに何とか調べられないものだろうか。別の習性では、酸性の水に強いことがある。他の魚では到底棲めない酸性湖や酸性河川にも棲むことができる。青森の恐れ山湖は特に有名であるが、信州でも高層湿原地帯の酸性池沼・池塘でも見かけることがある。pH2近くまで棲めると出ている書もある。

私が本格的(自称)に釣り始めたのは、ウグイやオイカワを狙ういわゆる雑魚釣りであった。胃腸が弱く呼吸器にも難癖が付いた私には、瀬に入り込んでの釣りは好ましくなかった。したがって、足を濡らさずに

瀬脇や細い枝川での流し釣りが主で、獲物もようやく稚魚の段階を越えたばかりの小魚が主だった。こんな私も夏になるといつとはなしに瀬に入って、もみ釣りに熱中した。ひきむしはこのごろ天竜川でもよく見かけるが、真夏でももみ釣りの姿は全然見られなくなった。流し釣りは釣り餌を流れに任すのに対し、前述の漁法は故意に餌を動かして、魚の食思衝動を誘う方法である。その一つのもみ釣りは釣り師自身が下流に向かって瀬の中に入り込み、竿はその約半分を流れの方向に浸けて釣り餌を流し、竿を握った拳の丈ほど引いたり弛めたりするのである。もみ釣りの名は釣り竿と水を揉合わせるようにして釣るところからきたものか。このように揉むことにより、釣り餌はあたかも餌が水中で跳びはね泳ぐ形になり、飽食の魚にさえも食思を誘うものと思われる。戯れにでも餌に挑んだ魚はたちどころに釣り上げられてしまう。もみ釣りでは3～4才魚と思われる20cmに近い揃ったものが釣れた。餌にはチカラカゲロウの幼虫の頭のとっぺんをちょっと鉤で縫っておけば、水中では泳ぐ形になる。これに挑んだウグイは慌てて餌を吐き出しても、鉤まで吐き出す余裕があればこそ、である。吐き出した餌がそのまま鉤すの方へずれて付いているのである。釣りあげた魚を外してから、ずれて残った餌を鉤に戻して釣ったことも珍しいことではなかった。

ひきむしには重い錘を使うが、錘を付けないでこれを真似た方法で瀬脇を引くと、大小様々なウグイやオイカワが飛び付くように食いついてきた。初夏の頃この方法でヒラタカゲロウにヤマメが食いついて大慌てしたこともある。

小学校の頃の水遊びは、その大半の時間をうろう掴みに熱中した。瀬脇のうろう掴みでは、カジカやヨシノボリもよく掴まえたが、一番の狙いはウグイだった。うろう掴みに飽きると、今度は浅い枝川へ移動して、いしぶち(石打ち)もよくやった。流れが緩く浅いところでは、20～30cmの大礫・巨礫は水面から一部露出していた。これに同等またはそれ以上の石を両手で打ちついたり、投げついたりするのである。この衝



撃が石の下に隠れている魚に脳震盪をおこさせて、ぴりぴりっと白い腹を光らせて浮び上がる。これにはウグイの5～6cm から10cmぐらいのものが多く、モロコもよく浮いた。不思議にカジカやヨシノボリはめったに浮かんでこなかった。秋の川ぼしのおか拾いに飽きた人達にも、よくこれが行なわれた。また、冬季越冬中の稚魚を狙う石打ち漁法もあった。これは玄能でコツンコツンと叩いては、たも網ですくったらしいが、私はやったことがない。

また別に、やや大がかりに越冬稚魚を狙う「けえずけ」漁法は、かいずけ（飼い付け）の訛であろうか。諏訪湖ではいわつか（岩塚）が訛ったやっか漁で有名だが、これと似た方法である。けえずけは餌を撒いて魚を集める意味であるから、いしずけ（石漬け）（言海所載）と呼んだほうが適切であろう。また『言海』には、ふしずけ（柴漬け）も越冬魚を狙う方法として出ている。しかし、柴を切り込む切込漁法は伊那の辺ではむしろ夏季、コイ・フナ・ウナギ・ナマズなどを狙う場合のほうを多く見てきた。

さて、「けえずけ」は晩秋の頃、瀬脇の少し下流のとろの所の川底をさらって窪みをつくり、これに20cm前後の大礫を水面近くまで積み重ねる。広さは1～1.5㎡、高さは40～50cm位のものになろうか。ウグイの稚魚はこれを格好の越冬場所としてぞくぞくと入り込んでくるのである。魚は1～2月の厳寒中に行なわれる。石積の周囲を菰付の竹箆で囲い、隙間をふさぐために菰の部分へは砂利を敷き、竹箆の合わせ目に箆をあてておく。囲いが完全になったところで、積み石の全部を囲いの外へ放り出すのである。積み石が完全になくなるまでには大部分の魚は箆に入るようである。残りは一休みして水が澄んだところで箆に追い込むのである。この方法によると、越冬初年目とみられる7～8cm のウグイの稚魚が圧倒的に多く、小さなウナギなども混じっていたのを見た覚えもある。私の推測では、この稚魚は冬中石漬けの中から外へ出ることなく、せいぜい外側の石に着生した藻類や微小生物を食うくらいであ

ろう。したがって、栄養摂取量はあまり多いとも考えられぬが、エネルギー消費量が少ないためか、意外に肥えていて食味もよく、特にこの雑魚茶漬けの味は懐かしい。

ウグイやオイカワの稚魚が冬季緑藻を摂食することについては、若い頃教材研究の一端で確認して驚いたものである。もう一つの驚きは、これらの稚魚に *Distoma* (羅) *distome* (英)・二口虫が寄生していたことである。いままで釣ってきた魚の多くは、はらわたを抜いていたのに、これに全然気付かなかった。図鑑で調べた範囲では、10以上の属の多くの種の *Distoma* が天竜川の魚のどれかの腸・鰓(うきぶくろ)・鰓などの何処かに寄生することが分かった。蛙の膀胱などではよく見たが、それにしても今まで如何に不勉強であったかを反省させられた。しかしこれらの吸虫類(*Distoma*)で人に寄生するものも2~3種が目についたが、貝類から家畜や人に寄生する肝蛭や日本住血吸虫のような恐ろしいものは見当たらないのでひと安心した。

「けえずけ」については子供の頃、新宅や隠居のおじさんたちが仲間で行くところを見たのが主だが、他にも2~3のグループの漁を見た。私の物心つく以前は、父もその親戚仲間の重要メンバーだったようで、竹簀や大釜などの漁具がついこの頃まで蔵屋の二階にごろごろしていた。雑魚茶漬けは隠居へ年始に行くとおきまりのように、ご自慢のこのご馳走にあずかるのだった。

さて、産卵期の「つき」の赤魚は味が良いといわれるが、それは、つけ場に出かけて河原で焼いて食べる雰囲気からくるものであろう。山椒味噌を付けて魚でんにでもすれば別のこと、実際は秋から早春までの味には遠く及ばず、ことに産卵期は一味落ちるのが常識であろう。

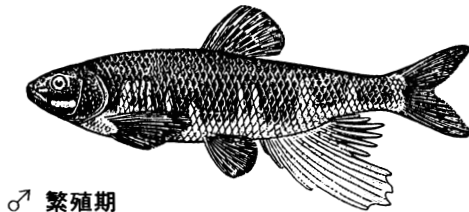
産卵のために♀♂がこれほど多数、いや大量に集まる例は他にちょっと思い当たらない。5月上旬頃から6月一杯くらいは、この最盛期である。この頃の水温が、13℃前後で最適温とされている。2~3cmの中礫の川底が、増水のおりに洗われて、深さも30~50cmの深さで、流速も

そこそこの瀬になっているところへ、自然に集まって産卵が始まるのである。それには昆虫における性フェロモンのような物質が先着の♀から放出されているとは、今のところ手持ちの関係書には見当たらないが、いずれ専門の研究者によって解明されるものと思う。このように魚が寄り付く場所を、つき・付き場・おのれなどという。これはおのれの名の如く、自然にできた産卵場のことである。漁師たちはこれに習って、人工的な付け場を工夫して作る。近ごろは魚を食べに来る人間集めにも格好な場所を選んで付け場を設け、食堂を兼ねる小屋がけまでしてこの期間中の大半を河原で生活する者もいるようである。

最近では川水の汚濁によって、川魚類の食品価値が下がり、漁獲量も少なくなってきた。川水が汚濁から回復し、魚類の数も殖えてくるまでは、自然保護の立場からも、このつけば漁に対して何らかの規制が加えられるべきだと思う。

#### 14. オイカワ

日本の淡水魚の和名は、その種類や棲息量の多い、琵琶湖での呼び名をもとにして付けたものが多いよう



♂ 繁殖期

オイカワ (日)

である。このオイカワの名ももとは琵琶湖だけで、しかも体型的にも色彩的にも婚姻色の鮮明な♂だけの呼び名だったようだ。幼魚や♀には、ハエまたはハヤの名があり、各地に広まっている。関西方面や新潟方面では、川魚を追い立てて網などに追い込む漁法のことを追い川というようである。もっとも、新潟のはサケ漁のようだが。そこでこの♂魚は動作も鈍く、追い込み漁のカモだったから、オイカワの名を貰い、♀の方は逃げ足が早かったから、ハヤの名が付いたとも考えられる。とすれば後述の橋爪式ガゴ漁法は、変形追い川漁ということになるだろうか。

伊那では、婚姻色の鮮明な♂をガゴ・クロクチ・ジンケンなどと呼ん

だ。それは前頭部の特長が方言のクロクチそのものであり、ジンケンの名は化繊の出始めの頃の人造絹糸を略して人絹と呼んだが、体がけばけばしくて寿命が短く、味も悪いことからきているようだ。ところで、ガゴの名はどうかと、国語辞典を見た。タガメの異名がある。これは水生昆虫中最も頑固な形相をしているが、ガゴもその形相の点では劣るものではないが、少々結び付きが悪い。富山では乳幼児やあかんぼのことをガゴ、岩手ではガゴコと呼ぶ。山口では親木のまわりに生える子芽（ひこばえ）のことを、対馬ではひ弱な子供の呼び名に使われているようだ。どれも、ガゴの早死につながっているのだろうか。実際は子孫繁殖のための大役を果たし、寿命の終点に近付いているためでもあるが。

オイカワは北海道と東北地方の一部を除く全国各地の河川・湖沼に分布し、朝鮮半島・中国の一部にも産し、近年は琵琶湖の稚アユに混じって、更に分布を広めているという。

さて、天竜川の中流域に当たる伊那地方では、オイカワは中層以浅を、ウグイが中層下部を泳ぐ立体的な棲みわけが見られる。トビケラ幼虫であるアオムシの餌でウグイはよく釣れるが、オイカワはあまり釣れないというように餌の好みの異なるのも、これと無関係とは言えない。トビケラ幼虫は完全に底棲だが、チカラカゲロウ幼虫は半底棲と考えられ、川水に流されやすく、中層以浅をも泳ぐことが多いと見られるからだ。

初夏になってアユが遡上してくると、ヤマメは溪流にのぼり、オイカワやウグイは瀬脇や瀬尻に移動する棲みわけも見られる。伊那付近では主にオイカワやウグイを雑魚と呼んだ。雑魚とは、アユ・コイ・ウナギなど以外の、味も品位も劣る他の小魚類を指した呼び名と考えられ、封建社会ではよく人間にも当てはめられた。

オイカワの学名は、*Zacco platypus* (T.et S.)だが、これによく似た同族のカワムツが、*Zacco temminckii*(T.et S.)になっている。これで見るとテミンクが先に目を付けたのがカワムツだったのだろうか。愛知県北設楽郡では、カワムツをザコと呼んでいたようである。その後

テミンクとシュレーゲルで別属の近縁種ハスなども研究して、オイカワとカワムツに Zacco の属名を付けたものと考えられる。オイカワの種名 Platypus は、体型が扁平な特長をとらえたものであろう。確かに近縁のウグイ・アブラハヤ・モロコなどに比べると、扁平の度合いが大きい。オイカワ・カワムツ・ハスの3種はよく似ており、オイカワと別属のハスは特によく似ている。しかし、ハスは大型に成長することと、両顎のあわさり目が「へ」の字状に曲がっていることで区別される。また、タモロコのところで触れたが、側線鱗数を調べるとオイカワは43～48に対し別属のハスでは50～59と、画然たる区別点もある。オイカワと同属のカワムツも49～65だから、鱗数でも区別できる。

前に戻るが、サウバーゲがアブラハヤを含む数種に Moroco の属名を付けたのも気になる。既にブリーカーによりタモロコ属には (Gnathopogon) の名が与えられていたため、せめてアブラハヤ属に Moroco の名を付けようとしたものか、あるいはカワムツの Sacco のようにアブラハヤ属のアブラハヤ・タカハヤ・ヤチウグイなどのどれかを、どこかの地方でモロコと呼んでいたのをとったのかも知れない。そこでこれらの地方名を見ようと、保育社の原色図鑑を見た。ところが「従来日本のアブラハヤは Moroco 属に入れられており、日本と朝鮮半島にのみ分布するものとなっていた。しかし、大陸の研究者はこれを認めず、同種を Phoxinus 属に入れてきている。云々」とし、「分類学者の精査が必要である」としている。

固いことはこれくらいにして、60年以上前からの思い出話に移ろうと思う。田の草取のお茶を届けに、姉たちの後について沢渡の堤防尻や下河原の田圃へよく行った。河原の浅い淀みを群れてゆるく泳ぐ雑魚の稚魚をすくって楽しんだ。ふたりで手拭の四隅を四手網のように広げてすくったり放してやったりした。レコードの針よりも細く小さい稚魚がきらきらと輝くのが美しく可愛らしかった。二番草三番草でも田の草取の頃のもののは産卵期の早いウグイの方だったと思う。

夏になると水浴びの間に砂遊び、泥こね、うろづかみ、ガゴ追いなどで楽しさいっぱいだった。小さな子供や女の子は手拭で「メダカすくい」ならぬ「ハヤッコすくい」に興じた7～8月頃、手拭ですくえるほどのものは大抵オイカワの稚魚といえよう。しかし、この稚魚でウグイとオイカワやモロコ・アブラハヤなどを区別することは難しい。

ガゴ追いは唐の木の先輩たちから見習った。その頃は下島堤防も尻が広く開いていて、ガゴ追いにあつらえむきのどぶが多かった。波立つほどの瀬の部分が少ないことが条件だが、泥底では水が濁ってガゴを見失いやすい。底の礫は細かいほど追いやすが、泥底の部分を多く含んでいる。深さも膝小僧より深くては追いにくい。ガゴさえいれば狭いほど追いつめやすい。広いとかなり追い込んでからでも、瀬の部分や濁った部分へ逃げ込まれることが多かった。この追い方の工夫と辛抱が私たちには一層の楽しみだった。1 km 以上も追い続けて、物陰に隠れたかと見て近寄るとまた逃げ出し、数 km 追うことも珍しくはなかった。ガゴの逃げる距離に比べれば追い手のほうは常にインコースだからまだ楽である。逃げあぐんだガゴが精も根も尽き果てて、アオミドロの固まりにでも頭を付き込んだが最後で、やすやすと捕まってしまう。アオミドロのない粗い礫のどぶでは、大型礫の隙間に頭を突き込むように隠れて捕まるのである。礫の下に隠れたようでも頭が外へ向いているときは大抵また逃げ出し、うまく逃げ延びるのもあれば結局捕まってしまうものもある。

こんなことに熱中していた私が上農に入学した頃のこと、完成後間もない下島堤防の内側にいくつもの井筋が堤防に並行して縦に灌漑用水を運んでいた。一番堤防際の井筋は水持ちの悪い田圃が多かったのか、井筋自身の水持ちも悪かったようで、井尻では干上がるほどに水の少ないのが常だった。この水量の細った井尻付近の水口にはたくさんのオイカワが下ってきて遊んでいた。人が近づくと競って上流へ逃げ上がるのが面白かった。真夏のことで天竜川も水が細っていたので、河原の井筋の

水は生温かった。今想い起こしても、この生温かい水の中で産卵をしていたのだろうか。普通は瀬脇や枝川の浅瀬で産む。産卵中の♀が釣れたときは、黄色い卵が掌や手首に飛び付くこともあった。おかもちの中ではたちどころに死に、酸素不足に特別弱いと思われるオイカワが、この井筋の中でも浅水なため酸素溶解が足りていたのだろうか。井筋の底の礫の表面に付いた水垢は、実は珪藻・藍藻・緑藻などで、この光合成による放出酸素で水量が少なければ飽和点近くなるのであろうか。

さて、このオイカワ群に混じっていた十数匹のガゴを捕まえることに一策を案じた。井尻から三枚目の田圃の水口のすぐ下に拳大の2～3倍ほどの坐りの良い石を十数個用意した。翌日、農家の昼休中にそっと上流から近寄って、用意して置いた小石を井筋へ素早く並べ重ねた。重ね終るか終らぬうちにオイカワ群団は競って遡上してきた。幼魚や♀は積み石の隙間を難なく擦り抜けて逃げた。中には障害を大きく飛び越えてゆくものもあった。ところが大部分のガゴは障害物競争の落伍者になったのである。運良く大きな隙間を潜ったものや、もぐり後のあがきが効を奏したものがわずかに潜り抜けに成功して、半数以上のガゴは私の手中に落ちた。しかし、2回目3回目は狙いとするガゴの実数が減り、ガゴも学習効果が上がって捕まる率も低下した。

教師生活の中では、進度に追われてこんな体験談は減多にしなかったが、このような生物の学習効果を「負の適応」であるとし、諸君の学習は「正の適応」が望ましいことを強調したものである。とにかく私が考案したこの漁法はこれが最初で最後だった。

ガゴをご存知の方には蛇足になるが、この障害物競争にガゴが不利なわけは、婚姻色と共に吻・眼のまわり・頬・下顎・体側・尻ひれなどに現われる追い星、特に頬をはじめ頭部のごつごつした突起物が致命的なハンディーキャップとなったのである。それにしても、生殖に生命をすり減らし、寿命の終焉に近いガゴを追い回したり、トリックで捕まえるなどは全く残酷なことだったと思う。

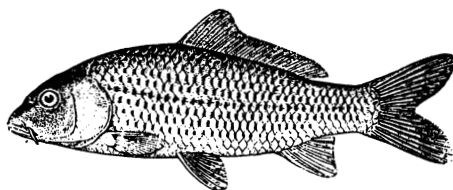
オイカワの寿命は3年くらいとされている。秋も深まって瀬脇の雑魚釣りで、大魚かと思わせるほどの抵抗をする大きなオイカワが時々釣れた。これまで婚姻色以外での♀♂の鑑別に無頓着だったが、このような大型魚は尻ひれの感じからも♂であろうと思った。

書物によれば普通2年で成熟するが、♂では3年もかかり♀では1年で成熟するものもあるとしている。私の推測では成熟♂のうちでうまく性を制御したものは、秋には精力を回復して翌年に備えるということがありそうに思う。ガゴは全くの猫またぎで味は悪いが、♀もまた他の雑魚も同様夏は美味とは言えない。

釣りの魅力にはいろいろあるが、初冬の冷え切った浅瀬から釣りあげた小魚にぬくもりを感じることさえある。こんなとき釣りあげるオイカワの輝きの美しさはたとえようもなく美しいものだった。かつて教室で生物愛護・自然保護を説いた私なれば、結局は残酷告白記というものになってしまうのである。

## 15. コイ

コイ目コイ科に属す。学名は *Cyprinus carpio* L. で種名は英名の carp からきているようだ。属名 *Cyprinus* には鋼の意があるようだが、リンネのつも



コイ (日)

りはどうだったか、体色からでもあろうか。和名のコイを国語辞典で見ると、こひら(小平)・こひげ(小髭)などの下略、または♀♂恋して離れない、などとしてあるが、これはコイに限ったことでもなかろう。その身が肥えているところから肥ひ、味が諸魚に勝るところから越え・越ひともある。これは私も肥料のことを施す前より、越え・越い・肥いと学んだことや教えたことも思いだす。また、「鯉の漢字は、その身に36列の鱗があるため1里は36町と関係づけた。」などは落語の種にもなり



そうだ。確かに大抵のコイの側線鱗数は 35 ～ 37 が普通で、36 列のものが多いことは事実である。「鯉が踊れば泥鰌も踊る」という諺があるがさしずめ私は泥鰌かな、などとひがむことはやめて次を続けようと思う。コイには水作り（洗い）・糸作り・衣煮など調理法はいろいろあるが、不思議と漁法が見当たaraぬのはなぜだろうか。

コイには、ヒゴイ・カガミゴイ・ニシキゴイなどがある。ヒゴイは突然変異種で、カガミゴイやニシキゴイは人工交配で生れたという。

カガミゴイはドイツで改良されたものかドイツゴイとも呼ばれ、ヨーロッパでは広く飼われているという。この辺では近ごろあまり見かけなくなりましたが、一頃はたくさん養殖された。その頃の評判では成長が早くて丈夫だということだったが、味に難点でもあるのだろうか。体表の一部または大部分に鱗を欠き、その部分が鏡のように滑らかなところからきた名前であろう。

ニシキゴイはもとはイロゴイと呼ばれたものが、カワリゴイ・モヨウゴイ・ハナゴイなどのような別名からきているようである。全くの鑑賞・愛玩用として、何十種もの品種を作り出している。

コイは喉の部分に鰓を作る骨の変化した咽頭骨と、その上に咽頭歯があって、何でも噛み砕くことができる。したがって、タニシ・シジミなどの貝類を好んで食べる。これに関する思い出がある。

坪庭の池に水を入れてメダカやキンギョを飼ったことはメダカのところで書いたが、その後しばらくの間ニシキゴイを飼った。残飯はもちろん、庭の草取で捕まえたミミズは必ずというほどニシキゴイに与えることにしていた。40 ～ 50 cm に成長したと思われる 4 ～ 5 年目の新緑の頃のことである。珍しくメジロがイチイの生垣に巣造りして、雛は順調に成育し巣立ちも間近になっていた。この庭では毎年のようにセキレイ・ホホジロ・コカワラヒワ・シジュウカラ・ムクドリ・ヒヨドリなどの小鳥たちが入れ替わり立替わり営巣・巣立ちするのを見てきた。メジロには今まで気が付かなかったのかもしれない。この巣立ち間際のメジ

ロたちに一大危難が降りかかった。ジムグリに似た蛇がこのメジロの巣に襲いかかったのである。たまたま庭屋さんのお茶休みを勧めに庭へ出た私が気付いたときはまだ蛇の胴体に膨らみは見えなかった。メジロの親子はけたたましく鳴き騒いだ。殊に親鳥の悲鳴は耳を刺すように鋭かった。家族の声援を背に私は懸命にメジロの親子を助けようとした。私の気持ちを解せぬメジロたちは、「一難去らずにまた一難」と大騒ぎで、ついに雛たちはばらばらと飛び立ち飛び散った。一羽の雛は着地が悪く、池の水際に転がり落ちた。水中でなくてよかったとほっとする間も置かせず、大きなニシキゴイが、体を横にくねらせ水面から半身乗り出して、メジロの立ちん子をぱくぱく、ぼりぼり音を立てて呑み込んでしまった。私たちはこの意外な新手の賊による一瞬のすざまじい光景にただ呆然と立ち尽くすのみだった。毎日可愛がって飼い育てた美しいニシキゴイが、この残酷劇を演じてから間もなく、どこからか野良猫の狙うところとなり、二つ減り五つ減り、ついに全滅するまで、家族の誰からも大して関心を持たれなくなっていた。コイの咽頭骨から思いがけぬ食物連鎖劇のお粗末になってしまった。

養蚕・製糸業の盛んな大正の頃、製糸工場では沢山使う水の一部を養鯉池にまわした。工場でする蛹はそのまま、または一部を乾燥してコイの餌にした。養蚕農家も仲買人に屑繭を安買いされるよりはと、座繰りにかけて自家用の糸にした。また蚕2匹が共同で作った繭を同巧繭と呼ぶが、これは両虫の吐き糸が絡み合っていて、繰糸(そうし)や仕上りが悪いので、これを自分の手で真綿に引き伸ばした。農家ではこれらの蛹を餌に湿田の一部を鯉池にした。これらの急ごしらえの池からは、一雨降る毎に幼魚や成魚まで僅かずつ逃げ出し、大雨で増水でもしようものなら大量のコイが逃げ出した。寄せ際の溝川でも2歳魚、3歳魚位のは子供達の魚踏みの筈にもよく入った。小学校2・3年の頃火追いの時とは別の一年先輩が、この溝川で1kgを遙かに越える大鯉を、魚踏みですくったことを今でもはっきり覚えている。

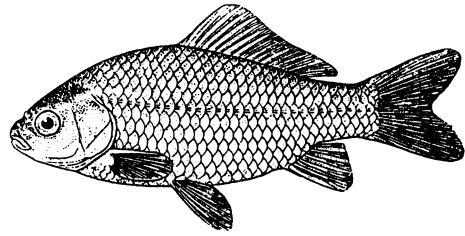
それから10年ほど後の昭和11年、下島堤防欠壊の大災害後の数年間、唐の木の清水ッ川は、鯉釣りに格好の淵になっていた。深さと広さの点で大物は居着かなかったが。ここではその数年間に3歳魚前後のものを何十匹釣ったとも知れない。その最初に釣った大物のときは、雑魚釣り用の継ぎ竿で、偶然糸だけは馬鹿太かった。そこは天竜川寄りで、40～50cmの浅水で流れもほとんど無かった。意外な大物の手ごたえに胸をおどらせながらも落ち着いた処理ができた。糸の切れる心配は無かったが、竿を早く立てないと継ぎ目から抜ける心配と、立てれば折れる心配とでどきどきだった。やっとの思いで足許に誘い寄せたとき、竿は穂先から一つ手前の継ぎ目で折れた。折れたのが幸いしてか、抜けも切れもしなかった。すかさず絶対安全の糸を手繰り寄せて引きずり上げた。私はこの時はじめて、釣りにおける竿と糸の力のバランスというものを体得できたように思う。大物狙いには4～5月の産卵期を控えた時期がよく、もっと深く広い大きな淵へ出かけた方がよいことは承知しながらも、そこまでは凝らなかった。それは遠くへ出かけるツクと暇の無かったことがブレーキになっていた。

ワカサギのところで、辰野の鉄橋から1 kmほど上流でのワカサギ釣りのことを書いた。その時、私と100mとは離れていない上流には一人の鯉釣りがいた。夕方に近付いていたように思うが、お客さんが来たのだなど見てから、20～30分をかけたかと思うほど長時間をかけて抱き上げるようにして釣り上げたのを遠目で見た。何kgあったかすごい大物釣りだった。寒鮒釣りのことは知っていたが、寒鯉釣りでしかもこのような大物釣りは後にも先にも見たことは無い。

## 16. フナ

コイ目コイ科に属す。フナ属はコイの亜種ともいわれるほどコイに近縁でよく似ているが、相違点はいくつもある。コイにある口髭がフナには無い。両者とも背びれ・尻びれの前端に刺がある。これがコイでは軟らかいが、フナでは触れると痛いほど頑丈である。肌の感触がコイは軟

かくフナは硬いので、うろ  
掴みなどで捕まえた時にフ  
ナとわかる。また側線鱗数  
を数えると、コイは34~38  
が多く、フナは29~31位が  
もっとも普通なので、これ  
だけでも区別がつく。



フナ（ギンブナ） (日)

昔から鮒に名を借りた語句は多く、鮒つく、鮒侍から始まって、鮒の念仏、鮒の骨無し、鮒のごみに酔うようななどがある。

フナの中にギンブナという種があり、これは体色でキンブナという種と区別したものであろう。ところが英名のSilver carp は、コイより一格ランクを下げた名と見られよう。英名はとにかく、前述の語句はどれもフナを蔑視してのことであろう。これは一つにはフナの行動が、鯉の滝のぼりのようにダイナミックでないことからであろうか。フナにとっては実に以って迷惑至極のことである。が、釣り天狗達だけはフナの芸の細かさをよく知っていて、「釣りは鮒に始まって鮒に終る」などというのである。これでフナの面目も立とうというものだが、当のフナに言わせれば、かえってありがたい迷惑だというに違いない。

フナの中にもいろいろな亜種がある。フナの中からヒブナが出ることがあり、これを品種改良して今日のキンギョが作られたという。先にちょっと触れたが、普通のフナの中にもキンブナ・ギンブナ・ゲンゴロブナなどがある。キンブナは体が黄褐色で、金属光沢を帯びるところからこの名があり、琵琶湖を除く日本全域に分布するという。ギンブナは体が青褐色で銀色を帯びたところからこの名があり、琵琶湖も含めた日本全土に分布するという。

♀♂の個体数比を性比といい、造化の神は大抵の生物にはこの性比をほぼ同率の 1:1 にしてくださった。不思議なことにこのギンブナには♂が極めて少ないのだそうである。ところで、魚の人工養殖には人工受精

が常識になっているが、ギンブナでは♂の入手が困難なため、ウグイ・コイ・ドジョウの精子を使って、その遺伝情報に無関係な物理的・化学的な刺激だけでいわゆる人工単為発生をさせることが実用化しているという。類縁関係が遠い親たちの間では染色体数などの関係で、受精しないのである。この人工単為発生ならば、ギンブナの遺伝形質はそのまま保持される。自然状態で♂が少ないと、他のフナの精子で雑種を生じやすいわけだが、実際には単為生殖で増殖しているようである。

次にゲンゴロウブナは、もとは琵琶湖特産だったものが、全国に広まったのだそうである。源五郎という漁師がこの大物をよく安土城主に献上したところからこの名が付いたという。ヘラブナの名は、関東でこのゲンゴロウブナの扁平なところを呼んだものか。

マブナの名は琵琶湖では本来のゲンゴロウブナに使われ、関東では逆にゲンゴロウブナ以外の名に使われて来たようだ。いずれにせよ主に以上の3種が全国的に広められて、自然交雑や人工交配で種本来の特長が乱れてはいるようである。

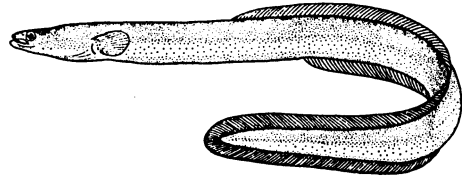
前にフナは掴まえた感触でそれとわかることを書いたが、これに関した思い出話を。

唐の木のいくつかのどぶには、ガゴ追いには不向きな泥底のどぶもあった。「いつも柳の下に泥鰌はおらぬ」というが、フナは水浴びの時いつ行ってもいた。どぶのまわりの柳の根本の泥土に、自分の体でえぐるようにして作ったかと思われるうろに、張り付くようにしていた。暑さを避けて昼休みをしていたのか、子供達の水遊びの騒ぎから逃れていたものか。それとも柳の軟らかい根の先を食べていたものか。いや餌ならば大好物のミミズがある。水出の折々柳の根本に絡んだごみが泥をかぶってそこにミミズの繁殖を促したのか。ひょっとして産卵では？と書物で見ると、4～5月から真夏までの間に行なわれるが、大雨による増水の翌朝が活発で、比較的浅いところの水草に産み付けるとあり、柳の根のことは載っていないが、これで日中柳の根への産卵が否定されたわけで

はない。しかし、避暑・避難・摂食などの推測に比べると、大分見劣りするようだ。結局は、老化の進んだ私の記憶の中で、フナの捕まえやすかったことが、高頻度とすりかえられてきたかの推理が的中といわれるかもしれない。

## 17. ウナギ

ウナギ目ウナギ科に属す。この属にはオオウナギという種もあるが、オオウナギは千葉県から長崎県までの沿岸の小河川に限られているようだ。またタウナギと



ウナギ (日)

称するものもいるが、これはコイ目ドジョウ科の別系統のもので、東南アジア方面が主産地で、日本にも関東以西に点々と分布しているが天然分布かどうかといわれている。

さて、ウナギは宮城県・新潟県以北には少ないが、ほぼ全国的に分布するといわれている。ウナギの古名は、ムナギ(身長)だったようだ。ムは身に通じ、ナギは長いものの意から蛇類の総称にも用いられたという。その後ムの子音が脱落して、ウナギになったという。偶然かウナギの属名*Anguilla*も蛇のようにくねくねした意を示すのも面白い。ほかに棟木説もあるが、建築材には長いものが多く、特に棟木をウナギに結び付けることは棟木に負担がかかりそうだ。また、胸黄説は婚姻色にも無さそうだが、ひょっとしてこんな腹色のものもないとは言い切れぬようにも思う。ところで、これが噺家の口舌にかかると、鵜難儀となる。この長い魚をくわえた鵜が、これを呑み込むのに難儀するのだそうだ。ついこの3月3日、伊那の先生方と岐阜方面への旅行中、たまたま長良川を渡る車中でこの話を出した。旅行好きで博識なある先輩の話では、鵜がウナギをくわえることはそう珍しいことではないらしい。何でもガイドの説明だと、ウナギはくわえられたとたん鵜の嘴に巻き付いて逃れ

ようとする。この時、舷を叩いて激励してやると、鵜は難を乗り越えてものの見事に呑み込むのだそうである。これと同じような説明を3月21日のラジオ「春・川を描く日本」でも聞いた。こうなってくると鵜難儀説も噺家だけの専売特許でもなさそうである。鵜の難儀さは人間にとっても同様で、素手で捕まえることは不可能に近い。茎葉に細かい刺の多いヒユ科の雑草に、ウナギツカミの名があるのも、またこれが好んで繁殖する場所から見ても、故意か偶然か体験上の名前とも思えてほほえましい。身長対頭長比で見れば、7～9の八頭身で、美魚というべきだが、気味悪がられこそすれというところ。

長い間の謎とされていた日本のウナギの産卵場所は、松井魁氏等の長年の調査研究の結果、北緯30度以南で、台湾東方ラサ島西南海域と推定されるようになった。また、日本で成長したウナギがこの産卵場へ帰るという説と、途中で死亡する説とがある。後者の考えでは日本へ来る稚魚は、すべて朝鮮半島・中国大陸産の親から生れたものとしている。地図を見た限りでは、私には前説のほうが納得しやすいように思う。南方の海面から300～500mの海中で、一腹から約900万個の卵が生れて海中を浮遊し、4～5日で孵化するという。卵からかえった扁平・透明なレプトセファルス幼生は、はじめ100～300mの深さの層を浮遊し、やや成長してからは30m以浅を遊泳して沿岸に近付くという。そこで変態してシラスウナギになり、しばらくは河口付近の岩や泥に付いた海藻の中で藻類などを餌にして育つといわれる。レプトセファルス(葉型幼生)の期間は約一年といわれる。変態したシラスウナギが河川へ遡上して2～3週間もすると、体色も黒変し、皮下に埋没した鱗もでき始めるという。その頃の体長が15cm内外だという。

私は昔30cmにも満たぬ仔ウナギが、夏のヤッカ漁の釜から出ず雑魚の中に混入しているのを覗き見たことがある。今にして思えばこんな仔ウナギは天竜川を遡上し始めてからそう長い月日かけたとは思えない。その道中のきびしさが改めて思いやられるのである。それにつけても、

アユのところでも触れたが、ダムの魚道（魚梯子）の不完全さからウナギも現在はほとんど放流のものだけといわれるが、まことに残念なことである。

国語大辞典には、ウナギの漁具・漁法として、次のようなものがある。

ウナギ筒：竹筒を適当の間隔で縄に連ね、水底へ沈めて鰻の潜入するのを待ち窺い引き揚げて捕らえる。

ウナギ塚：うなぎぐら・あぐらともいい、もとは大鰻を捕まえて食べた崇りを鎮めるための塚だった。その後、秋になって海に下る鰻がここで一休みするのを狙うようになった。

ウナギ突き：銚（もり）のようなもので突き刺して捕まえる。

ウナギ搔き：長い柄の先に曲がった鉤をつけた漁具。

ウナギ鋏：刃に対する片面に針が植えてある。

これらのうち、伊那近辺で私の見たものは鰻塚に類するやつか漁ぐらいである。それも夏季の柴漬け漁のほうが大きなのがとれたように見ている。ウグイの稚魚を狙うケエツケに、ウナギやナマズが入ると、漁獲量が極端に落ちるので、ケエツケ漁には有害魚として嫌われたようだ。折角のウグイを食い荒し追い払うからである。

私はやらなかったが、以上のほかにウナギ釣りがある。見聞きした覚えでは、穴釣りと捨て鉤釣りとがある。穴釣りはワカサギなどを氷の穴から釣るが、これはうろ穴釣りの意である。捨て鉤釣りは、場所を選ばぬ捨て鉢的な釣り方のことか。一般には穴釣りが多かったようだ。どちらも顎の鋭い専用の鰻鉤が使われた。鉤素兼道糸の仕掛けは、鉤へ結びつけた麻を左縄（ふつうの逆）に細く70～80cmほどの長さに縋（な）ったものだった。右縄縋では、鉤に掛かったウナギのあがきが左旋回なために、縄の撚りが戻って切れ易いからだという。

沈床や蛇籠などへ瀬が打ちつけて、ぐわっと水を吸い込むような穴は最高と聞いていた。下半身いや上半身も肩口まですぶ濡れになって、篠竹などでつついては、ここぞと思う穴を探すのが大変なようだった。釣



り餌はシマドジョウにきまっていたようだ。この釣り糸ならぬ釣り縄を、頑丈な支えになる何物かに目立たぬように結び付けておき、翌日早々にこれを見て回るのである。先輩経験者の話では、鉤に掛かったウナギをうろ穴から引出すのが一苦勞とのことである。

捨て鉤の方は、丈夫な長い麻縄へ50～60cm間隔に、鉤素部の短い鉤を5～6本つける。縄の両側には重石を結び付けて、流れの緩い部分を横切るように投げ込んで置くと聞いた。私も一度だけこれをやってみたが、だめだった。もっとも、文字通りの捨て鉤で、しかも餌がミミズだったからでもあろう。

宮木に住んでいた頃の夏、よく河原へ行ったときのことを思い出す。あの辺の天竜川には、一寸した庭石ほどの石がいくつも転がって、30cmほどの深さの瀬から露出していた。これらの石の下へ手を差し込むと、きまってというほど、太い大きなウナギがいた。石と川底との接触面を体で巻くようにしていた。何とかして獲物にしようと、だましすかすようにしても、ただのらりくらりと私の手からうまくすり抜けてしまうのだった。また余りにも太くて大きいので、指を噛まれはせぬかとの怖さもあった。

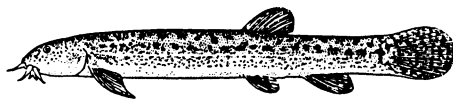
子供の頃、近所の料理屋でウナギを料理するところをよく見た。まな板の上に錐で止められ、切り放された頭の小さな目玉と、大きな顎にぎしりと並んだ細かな鋭い歯が気味悪かった。今、精密工場では手脂防止用に薄手の手袋が使われているようだ。あの時のウナギ掴みにこれがあつたらなどと悔やまれる。

私が部落惣代をやらされた年の、部落の一斉河川清掃の時のことである。天竜川から取り入れた灌漑用の井筋は、秋から冬中完全に乾いていたが、これも一応ごみなどを拾う対象に加えた。作業は順調に進み、慰労懇親会も盛会裡に終ってほっとした頃、若い役員から二次会に誘われた。料理屋でもない普通の商店の奥座敷で盛んに気炎が上がっていた。ここでは肴が大鰻の蒲焼きと洒落ていた。「大惣代にも是非一口味わっ

て欲しい」ということだが、肴より酒の一斉射撃に閉口した。入れ替わり立ち替わり、ことの次第を披露してくれるのだった。ことの次第というのは、井筋がバイパスを潜り抜ける辺りに、井底の深い部分があり、晩春まで豊半豊分ほど氷が解け残っていた。水の少ない、狭い溜り水の中の大鰻は難なく捕まえられたのだそうである。詳しい話は後からゆっくり聞くことにして、気炎を上げることに協力した。その時のウナギは、味はともかくとして皮のこわかったことはよく覚えている。かなりの年数を経た老鰻だったのであろう。氷の下とはいえ「水のないところでよくも生きていたものだ」という疑問もあろうかと思うが、①水の下は水がなくても100%近い湿室であったこと、②は皮膚呼吸である。呼吸量（ガス交換量）は、一般に下等動物ほど体表（皮膚）の割合が多く、鳥類・ほ乳類では1%弱だが、カエルでは約50%、魚類ではそれ以上とされている。ウナギは環境温度10℃以下では、体表からの酸素摂取量が60%以上に達するという。したがって、冬季以外ならば雨中・雨後の夜間は陸に這い出して、新天地へ移動することも出来るといわれている。

## 18. ドジョウ

コイ目ドジョウ科に属す。アジア大陸東部に広く分布し、日本も全土に産するが、北海道のものは天然分布かどうかといわれている。池沼・水田およびこれに続く水路などの浅い泥上に棲む。



ドジョウ (目)

口のまわりには、上唇に3対・下唇に2対計10本のいわゆる泥鰌髭を有す。国語大辞典で語源説を見ると、泥津魚（どろつうお）・泥棲魚（どろすみうお）・土長（どちょう）・土尉（どじょう）・泥髭（どろせう）の諸説がある。後の2説は共に特有の髭に、土長は体型に着目してのことだが、すべての説に共通して、棲息環境がうたい込まれているのが面白い。漁法はと見ると、ドジョウ掘り・ドジョウ打ち・ドジョウ

釜などがある。ドジョウ打ちは、柄の先に針を付けたもので突き刺す漁法のようなのだが、やったことも見たこともない。ドジョウは盗人仲間の隠語で針の意があるようで、針に針を打つ皮肉なことになる。

ドジョウ掘りは、秋から初冬にかけての頃、水枯れや排水で干た水田や沼などの泥土を掘って捕まえる。ドジョウの体表もこれに接する泥の面にも水気が切れて、体表面の湿り気だけで仮死状態で生きているのである。かなりの量の酸素は体表からも取れるが、腸内に呑み込んだ空気からも腸壁を通して取り込めるのである。もっとも発生的には呼吸器は消化器の原基から分化した器官で、両器官の縁は近くそれほど不思議なことではないのである。

ドジョウ釜は「長い綱でいくつも繋げて、水底に沈めて用いる」と出ている。だが私の覚えでは、普通の釜は尻を括るようになっているのに比べて、ドジョウ釜は極小さく、また釜尻には生草など丸めた栓を詰めるようにスズダケで横に編まれていた。田圃の場合は土用前頃までは上り釜を水口に、土用過ぎには下り釜を後口（あと）に打つように聞いていた。それはドジョウが土用を境に春夏は産卵のために遡上し、秋は越冬のために下る習性を伝えていた。

産卵は本州中部では6～7月とされているが、山地を控えた伊那の辺は幾分遅いように思われる。小溝の水草や稲株などに生み付けるとある。勿論そこには♂も来ていて、かなりウェットな生殖行動を伴うようであるが私は観察していない。生殖を終ったドジョウは、盆すぎ頃から大雨・小雨が降る毎に段々下って、水の深い泥底のどぶへ下るのである。

子供の頃雷雨の予想される時には、大粒雨がぼつりと落ち始めると、慌てて寄せ際の田圃へ下り釜を打ちに行った。雷雨の静まるのを待って釜上げに行くと、小さな釜に太いドジョウが10匹もそれ以上もよるよる入っているのが嘘のように思えた。

ドジョウ掘みといえば運動会の余興種目として今でもよく行なわれるが、実は自然な田圃の中で、畔道を歩いての漁法なのである。家の男衆

に得意な人がいた。昼休みの一寸した時間に大きなのを20も30も捕まえて来た。夏の日盛りに泥の面に横になって、これも人並みに昼寝をしているのであろうか。それにしてもどんなに注意深く近寄っても、人の気配にすばしっこくぴちよびちよっと水音を立てて泥の中へ逃げ隠れるのである。お決りのように数10cm四方くらいの範囲で、数カ所の泥を掻き立てて濁らせてから、泥へ潜るのである。これが、彼の最も得意とする水遁の術であり、陽動避難術なのである。ほんの1秒足らずの行動のうちの、最後の本当の隠れ場を見究めるのが、この漁法のこつのようなのである。後は手指の力を抜いて、そっと泥の中に包み込むように掴み上げるのである。

昔は緑肥用レンゲ草の種子を播く都合もあって、9月に入ると田圃の灌漑を止めた。表面の乾いた泥の中で、のんびり夏眠していたドジョウも少し涼気だってくる頃になると今度は冬眠の準備に向かうのである。夏のうちに釜に入ったり捕まえられたりするのによくよく運の悪いやつで、祭頃までにはほとんど田圃から溝やどぶへ下るのである。祭の前頃は寄せ際の小溝には、田圃から下ったばかりのドジョウがたくさんいた。この辺には千本つつきという、ドジョウだけを獲物とする漁法がある。ドジョウにとってはまた一難である。辞典にも千本搗きという土木の基礎工事のことは出ているが、この漁法については載っていない。してみると、それほど一般に普及した漁法ではないのだろうか。とにかく語源的には千本搗きが無関係ではなさそうである。

握り加減の太さの竹棒を両手に、溝川の底泥を千回というほど根気よく突っ突くのである。ドジョウはこの泥の振動で川下に当てたせせりや釜に段々追い込まれるのである。ドジョウは獲り易いが、逃げ出しの名人でもある。私は寄せ際の小溝で根気よくつついてとった。大小不揃いな沢山のドジョウを長持させようと思ったのが失敗のもとだった。大バケツに入れて篩で蓋をし、上に中くらいの砥石を載せて簡易水道の水をちょろちょろかけ流しにしておいた。翌朝気付いて見ると、ドジョウは

もの見事に一匹もいなくなっていた。コンクリートの浅い排水路にも一匹も見当たらなかった。全く、狐か狸にだまされたような感じだったのが忘れられない。いま魚類図鑑の〔利用〕の項に、「養殖は簡単だが、逃亡することが多いから注意を要する」との記述を見付けたのである。期せずして、私は何kgもの材料を使ってドジョウの逃亡実験に成功し、前記述の正しいことを立証した次第である。バケツがわずかに傾いて、かけ流しの水が片側にだけ流出していたのも、逃亡を更に容易にしたか。田圃の後口に当たるバケツの片側で、何十匹、何百匹が頭を揃えて押せば、500～600gの重石（おもし）は問題ではなかったのである。

わずかな隙間に先頭ランナーが頭を突き込んだとたん、次々のランナーが身を挺して隙間を保持拡大しながら一気に抜け出たにちがいない。

さて、沢渡には下小出との境に、八丁河原と呼ぶ河原が田圃になっていた。段丘崖には浅間森という森に面した部分が沼やどぶになっていた。新宅の人たちは田圃続きのこのどぶで簀を張り、中央へ大釜を当ててよく千本つきをやった。どぶが広いので、3人が並んで大ぼらをふきながら気長につついた。こうして、一回に何kgものドジョウが、大釜に入った。これを三回四回に分けてやった。

ドジョウは冬になると完全に泥に潜って冬眠状態になる。休眠度はカエルよりずっと浅いが、しいて言えばカエル型に近い。これを泥ごと鋤簾で掻き上げて獲る「泥上げ」もよくやった。唐の木のだぶは、かなり遠方の人達も目を付けていた。プロ級の人達が鋤簾に金網を掛け、柄を長くしてどぶの奥の方までさらっては獲った。バイカモ・フサモ・オランダカラシなどの水草が少しでもあるところでは、フナ・モロコ・アブラハヤ・ウグイなどまで獲った。またこの人達は、押し網でこれらの魚を手さばきよくすくっては獲った。押し網というのは、桧の若木をU字形に曲げて、5～6cm幅の板に固着させ、袋網を張って長柄を付けたものだ。この網で、泥面を浅く削るように押すと、泥上に沈んだ落葉

や水草の中で越冬していた魚は、皆ごみや泥と一緒に押し網に入る。これを素早く手もとに引き戻してすくい上げるのである。

ドジョウの調理法では、私は食べていないが柳川鍋が有名である。浅い土鍋にささがき牛蒡を敷き、そのうえに背開きにして骨と頭を取ったドジョウを菊花状に並べ、しょうゆ・酒・砂糖などの割下を加えてよく煮込み解き卵を流し込んでとじたものだそうだ。早く言えば、ドジョウの卵とじて、これなら母の味でも覚えがないことはない。ドジョウの蒲焼きも、ナマズの蒲焼き同様軽くておいしいものである。特大のものを蒲焼きにしてほかは泥鱸汁にしたが、これはみな懐かしいものになってしまった。

戦後、農薬や化学肥料などの直撃を受けた上に、耕地整理や各種土木工事で棲息の場を失った点など、淡水魚族中でも最大の被害者であろう。農薬の規制などで水田の自然増殖をはかることは勿論、積極的に人工養殖が盛んになるような方策はないものだろうか。

## 19. シマドジョウ

コイ目ドジョウ科に属す。  
北海道と九州西部を除く日本全土に分布するという。  
体側中央線上に暗褐色の斑



シマドジョウ (日)

紋が10数個くらい並び、これを貫くように 淡い褐色の横縞がとおっているところからこの名が付いたものであろう。棲息環境が流水の砂上であることから、スナドジョウとも、行動を起こす時、腹下の砂を胸鰭や腹鰭でかき立てるので、スナハギ(砂剥ぎ)とも呼ばれる。ひょっとすると砂掃き(スナハキ)から転じたのかもしれない。普通のドジョウが沼地を好むのに対し、砂礫底の川に棲むのでカワドジョウとは全国的な別名のようなものである。縞以外の形態的な特長は髭が短くて上下併せて6本と少なく、目の下に先端が二又になった棘を左右一對具えている。この棘の機能に付いての記述は見当たらず。後述のヨシノボリより更に瀬脇

か浅瀬に棲みわけながらも、洪水に見舞われる可能性は同様である。ひょっとして、ヨシノボリの吸盤に似た働きをするものか。よくドジョウを生で呑むと強精薬になるとかで、呑み込む時に棘が喉にひっかかりひと騒がせすることがある。

普通のドジョウは、分解過程の植物を泥と一緒に食べるというが、シマドジョウは、微小動物のみを摂取するという。カマツカと一緒に棲み、カマツカのおぼれを頂戴するものもあるというが、果たしてどうか。

普通のドジョウは、ブリその他の大型海産魚の釣り餌にするそうだが、シマドジョウはウナギ釣りには貴重な釣り餌魚である。この魚はまた鑑賞用としてアメリカなどへ輸出されるそうだ。

ところで、昭和35年前後の頃だったであろうか、近所の子供さんが魚踏みで珍しい魚がとれたと言って淡紅色のシマドジョウを持ってきてくれた。成魚にはちょっと間のある、弱々しげなシマドジョウだった。生物教師ということで、私が頼りにされたのであろう。その手前もあり、また珍しいので大切に育て飼ったが間もなく死んでしまった。死体から剥がした鱗を顕微鏡写真に撮ったことは覚えている。その後、よそでもちょいちょい赤いドジョウがとれた話を耳にした。

ヒゴイのように突然変異によるものだったのか。これをうまく増殖すれば、鑑賞価値も更に上昇したであろうに。だがその後ずっと目にも耳にもせずに忘れていた。

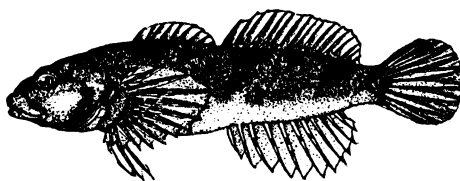
ところが4月14日のテレビニュースで、赤いオタマジャクシのことが出た。何でもニシキゴイの色を鮮明に発色させるための特別食で育ったオタマジャクシが、赤色になったというのである。それが餌の効果によるものかどうかというような話だった。

私の推測では、ニシキゴイには単なる栄養的発色効果を示した餌が、オタマジャクシには化学的突然変異として、例えば、DNAの塩基対置換などのような微小変異で、体色変化が起こらないとも限らないと思うのである。

さて、シマドジョウの食味は良くないといわれている。だが私の記憶では、腥みがなく、舌触りもぬらぬらがなく、さっぱりとして良い。ヨシノボリを佃煮風に煮ると美味だったが、これに混入したシマドジョウも決して劣らぬ味だったように思う。

## 20. カジカ

カジカ目カジカ科に属す。和名の由来に、河鹿の語源説もあるが、河鹿蛙と混同したためか。同名の魚と蛙の両者は、昔の歌詠みや物書きなどによく間違えられたようだ。



カシカ (静)

魚類から両生類へ進化した過程を考えれば、両生類の仲間であるサンショウウオなどは終生えら呼吸である。またイモリは勿論、カエルでさえも発生初期の数日間はえら呼吸しているほどで、魚と近縁であってもカエルはカエルなのだ。またサンショウウオも、名前はウオでも魚ではなくカエルの仲間と言った方が近い。河鹿とカジカ(鰍)は、棲息環境が清流の瀬に共通し、共存することが間違いのもとであろう。もっとも、カエルの方がやや浅めで緩めの瀬ではあるが。河鹿の玉を転がすような鳴き声を鰍の声と錯覚したにちがいない。

初夏から盛夏にかけての頃は、天竜川でも太田切川でも競い合うように鳴いた。昔姉たちと捕まえてきては流し台の下の湿った土間へかこい飼いで鳴き出すのを待つのが楽しかった。今日この頃、天竜川では聴けないが、晩春から初秋にかけて溪流沿いを注意深くさかのぼれば、このきれいな鳴き声には出会えよう。午前よりも午後、午後とも夕方によく鳴くが、曇り日なら午前にも聴けたように思う。水をかぶらないで、しぶきに濡れたほどの小石の上で鳴いている。鹿の鳴き声より澄んだ、千鳥の鳴き声より更に細く高い声で、きゅるきゅるきゅる・キュルキュルキュルというように聞こえる。念のため千鳥の鳴き声をどう表現して



いるか、関係書で探して見た。書物によりまちまちだが、長野県野鳥図鑑にはシロチドリの飛行中の鳴き声を「ピュルピュルと鳴く」としているのが似ていた。

アマガエルより少し大きめでスマートな♂のからだから発する呼気流による振動が、鳴嚢（内声嚢）によく共鳴してあのような美声になるのである。♀ならばコロラチュラソプラノというところだが、不思議と♀は鳴嚢もなく、鳴かない。私には500～600m離れていても聞き取れるが、初めての者にはなかなか聞き取れず、歯がゆく思う。クラブの生徒とスーパー林道の調査で尾勝谷付近の大崩落の惨状に驚いているとき、谷底の方からしきりにこの美声が聞こえてきた。だが生徒たちには注意を促しても聞き取れなかった。もっとも私は、教室でも地獄耳の異名保持者ではあった。

つい最近、犬田切橋から700～800m上流の地点で聴いたときは、自分の耳を疑うほどだった。食品工場の排水が流入して、清濁すれすれのところだったからである。

さて、語源説から河鹿で思わぬ回り道になったが、鰻にかえることにしよう。寒さにかじかむように見えるとの説もあるが、底棲魚の特長としての静止の様子をそのように見立てたものか。かしこまることを高知・山口方面ではかしかまるといい、これを理由づける説もある。私にはこの方が実感が湧くように思う。とにかく特有の胸ひれで威張った、一つの風格を持った魚である。

分布を見ると、両側型は北海道・本州（秋田・新潟・石川・福井を除く）・四国・九州（宮崎・鹿児島を除く）に、湖沼型は琵琶湖のみに、河川型は本州（和歌山を除く）・四国・九州（宮崎・鹿児島・熊本を除く）に分布するようである。一般に両側型は下流域に、河川型は上流域に棲むことは納得しやすい。勿論、上流域に当たる伊那の近辺には、河川型のものだけである。

昔はこの辺では、カジカは祝い肴として欠かせないものになっていた。

串に刺して遠火で焼くと、体を鯪張りにひれを大きく広げて一層威張った形になる。広げたひれを黒焦げしないように、よく手がえししながら気長に焼き上げる。これをたね（具）にしたカジカの吸い物は、いちげんの客にも最高の馳走とされていた。いちげん（一見）の客は初めての客の意で伊那では結婚にかかわる最初の相手方の客のことを言い、最高のもてなしをするのが慣わしになっていた。

念のためいちげんを『国語大辞典』で見ると、「婚礼諸式の一つ。婿が初めて嫁の親に直面すること。初婿入り」。もともと婿入り婚の時代の儀式だったが、嫁入り婚になって意味内容が混乱し、親族の初対面や、里帰りの挨拶の意にまで使われるようになった。

方言のところには、婚礼の時の最初の親類づきあい（長野県上伊那郡）とある。大昔の婿入り婚時代からの名残が、この辺にはつい最近まで残っていたのである。嫁方一見客の帰りが明け方になることは珍しいことではなかった。

私は兄弟姉妹が多く、長男夭逝後の次男に生れたばかりに、いちげんにはいつも主賓の座に坐らされた。上の姉の婚礼の時、私は小学校6年生だった。いろいろと窮屈な思いをさせられた後、座に着いてまだ酒宴に移ったばかりの頃、この主賓が居眠りをしそうになったらしい。媒酌人の計らいで別室へ下がり、一眠りして酒宴の終るのを待ったことを覚えている。戦後もなおしばらくは、このばかばかしいようなことが名残をとどめていた。

さてカジカの方言を見ると、ドンボ（福岡）・ドンコ（関西）・オコゼ（琵琶湖）・ゴリ（北陸）などがある。「ゴリ押し」の語源となったゴリ押し漁法については、ヨシノボリのところで述べるが、かなり遠縁のヨシノボリ・ハゼ・ダボハゼ等を含めた混称の形で、広く他の地方でもゴリと呼ばれていたようだ。それにしても、ヨシノボリやダボハゼだったらまだしも、カジカにゴリ押しは少々無理なようだ。またこの漁法はこの辺では見られなかった。

長雨・豪雨のとき、泥で水が濁るとカジカは泥水には弱かった。特に春先の大雨は雪解け水で、増水汚濁しやすく、カジカ踏みの絶好期だった。汚濁水に酔ったカジカは、瀬脇や浅瀬に押し流される。これを狙うのにカジカ網があった。四手網は、ヨシノポリやシマドジョウも逃がさぬ細かい網目なので、水の抵抗が強く、カジカ踏みには少々無理だった。

更にまたこの辺りで呼ぶ四手網は、諏訪湖などの四手網と形は似ていても、魚踏み用に変形し、底網だけでなく追込み口以外の三方は、魚の逃げ防ぎに20~30cm幅の囲い網が張られているからだ。それでも流れのずっと緩い浅いところでは、泥酔いのひどいカジカが少しは入ったようだ。

カジカ網は、桧の細丸太を半円形に曲げて、粗めの網を浅い袋状に張ったものだった。これを三日月網と呼ぶ地方もあるようだ。カジカ網は、かなりの荒瀬にも耐えるものだった。汚濁や増水が急激な時ほど、カジカをはじめオイカワやウグイなどまで泥酔いして流される。底棲のカジカは、泥水に抵抗しながらも次第に瀬脇や浅瀬に押し寄せられて、カジカ踏みの獲物になるのだった。瀬脇や浅瀬とはいえ、洪水時であればおおげさに言えばカジカ踏みは命がけだった。

カジカ踏みの話に花が咲くと、「転びかけて、危うく起き上がるときの網にごろごろカジカが入っていた」話。「小ビク(3升ビク)に一杯になり、ビクから飛び出すカジカを左手で防ぎながら、やっとの思いで中州から帰った」話。「中州から帰りがけに溺れかけ、小ビク一杯のカジカの大半を流してしまった」話。とにかくカジカ踏みは荒仕事で、水泳に自信のある者でないと危険だった。

この辺では、三峰川・小沢川・小黒川・太田切川などの溪流のかなり上流から一気に押し流されたカジカは、やや傾斜の緩い天竜川へ出てほっと一息つく間もなく、カジカ踏みの手にかかったものであろう。私も数回の覚えがあり、はなびく半分程がレコードだった。こんな大漁のときは一部を串焼きにし、弁慶に挿して囲炉裏端の天井に吊しておくのが自

慢だった。またこれを不時の来客の肴として保存する習慣も、今は昔の語り草になった。弁慶というのは、藁苞（わらづと）を逆さまに吊したもので、串焼き魚を何本も挿して保存するのに用いた。その名は弁慶が衣川の合戦で体中に矢を射立てられて立往生した姿に見立ててのようである。

産卵適温も産卵期も、湖沼型・両側型・河川型でかなり違うようだ。河川型の伊那近辺では10℃前後と推測される。測っても見ないが、2月中旬頃の天竜川の水温が5～6℃として、これより3～4℃温かい産卵場を求めて遡上すると思われる。初期発生に水温の高いことも必要だろうが、それが湧水源に近付くことになり、卵をより清澄な水に保つことにつながろう。カジカは水が温かいほど湧水源に近く、濁りが少ないことを知っているかのようだ。伊那付近での産卵は、2月下旬から3月上旬頃が中心であろうか。寒明けの頃から、産卵のための遡上が始まると見られる。ここぞと思うところまでは、何kmでも遡上するのであろう。段丘崖のワサビ畑まで上がってきていることも珍しくはなかった。遡上は夜から朝にかけてが活発のようである。

この産卵習性を狙ったカジカ釜漁法がある。昔、犬田切橋を挟んで両側に籠屋（竹細工屋）があった。どちらも黙々と器用な手さばきで手早な仕事をしていた。皮付きの上等部分を剥いだ内側の弾力性に欠けた端材の肉厚部から更にカジカ釜材を剥ぎ取った。カジカ釜づくりは彼らが暇な折の手なぐさみ程度に見えた。端材の中から拾いだした粗悪な材料で、きわめて粗製で粗めの釜を編んだ。カジカの♂は頭が大きく、♀は卵をはらんだ腹が大きいので、釜はいくら粗めでも間に合った。釜の打ち場が瀬脇とはいえ、かなり急な流れであれば、粗目が水の抵抗を減らして打ち易くした。また釜の口元の流速の変化を軽減させ、自然さを保つ効果があったにちがいない。この辺りの人達はこの粗製の釜を安く買ったが、籠屋を含めた何人かが、縄張り争いもなく、時期になると競ってカジカ釜を打った。ヨシノボリや他の稚魚どもにとっては、もし釜に入っ

ても粗い隙間からたやすく難を逃れ得るだけの救いがあった。だが漁法からすれば、卵をはらんだ♀親まで獲るカジカ釜漁は当然禁止さるべきものが、黙認されていたものであろう。

こういう私もカジカ釜こそやらなかったが、次の思い出がある。下島堤防欠壊に伴う大水害の翌春（昭和12年）、寒も明けたかと思う頃のことである。洪水が押し流した石礫で押し被せられた清水ッ川は、完全に石礫の下を伏流して地下水のようになっていた。これは前年の夏中コイ釣りを楽しんだどぶの西北端で湧き出していた。偶然その湧出地点の石礫の下にカジカが産卵場を探して入り込んでいるのを見つけたのである。石を取り除いては、ビクに拾い込むというほうが適切なほど、ほんの短時間に花びく一杯とった。泥底のどぶを通り抜けての遡上を、ここで阻止されて、後へも先へも動きがとれないで、過密状態になっていたのである。

さて、普通の産卵適地を考えてみよう。川底は緩急交互に段々になっている。平坦部を流れる水の一部分は地下へ潜入する。急傾斜部では一旦地下へ潜入した地下水（空隙水というべきか）が、ある距離を伏流して再び湧出している。この潜入度が深いほど、伏流距離が長く湧出量が多いほどカジカには受け止め易からうと思われる。普通はこのような浅瀬の部分が産卵の適地ようだ。そこでカジカの夫婦は、人の頭の大きさ位で、扁平だが瀬水をかぶらず、上部が露出している石を選ぶことを忘れない。露出石を条件にする理由を考えてみよう。温度条件では日中の太陽熱吸収と、夜間の放熱とで $+ - = 0$ か、あるいは昼夜の温度変化が+に作用するののだが、大したしことはなさそうだ。重要なことはお目当ての石が水をかぶれば、石の下から砂が湧きたって、悪いことを知っているかのようだ。次に、この条件に叶った石を探し当てたカジカの夫婦のうち、♂が先にその石の下流側から潜り込むようだ。根気よく体をくねらせて空洞を作り、そこへ♀を誘い入れて石の下面に産み着けさせる。その時体外受精が行なわれる。産着卵数は、河川型では150~300と

いわれる。これが両側型になると 600~1,500 と増え、湖沼型では 2,000~3,000 と言われる。後者が発生過程中的犠牲がもっとも多く、前者は♂親の保護が十分で、犠牲が最小限と思われる。河川型では、産卵という重荷を下ろした♀親は、後の一切を♂親に任せて、産後の回復のために自由な瀬に開放される。後に残った♂親は卵塊を外敵から守りながら、大きな胸ひれや背びれで、卵面に微細な砂やごみの付着するのを防ぎ、常に新鮮な水流を送ることに務めるのである。この♂親を取り除いて、孵化率の極端に低下した実験結果の報告もあるという。

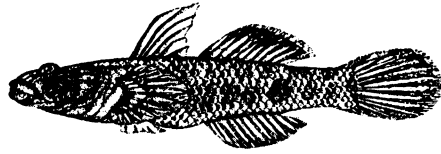
この時期を含む前後の♂に顕著な婚姻色は、第一背鰭の先端部（辺縁部）が、鮮やかな金色に輝いて美しい。私は他を知らないが河川型のものが特に美しいのだそうである。そっと取り除いた石の下に、黒ずんで静止したカジカの背鰭は、羽化したばかりのキベリタテハ蝶を連想させる。手持ちの書物には、孵化までの卵期間を記したのを見当たらない。カジカの卵が、ヤマメの釣り餌に最高とされていることから推測しても、産着卵期間はかなり長いと思う。河川型のものでは、孵化後なお10日程は、そのまま石の下で過ごし、以後は自由な底棲生活に入り、微小昆虫などを食べて成長するという。♂親の保護期間は孵化までか、孵化後の数日間ぐらいかもわからぬが、子背い虫の♂親と比べても、ひけを取らぬ民主親爺ではある。

初夏の頃、雑魚釣り餌のチラをすくう篩にチラほども小さくて可愛いカジカの仔がよく混入していた。白黒のはっきりした斑紋で、ヨシノボリとは明確に区別でき、まさしく、この春の仔とわかった。「よくぞこれまで」といじらしくて、そっとごみと一緒に流してやったものだ。

## 2 1. ヨシノボリ

スズキ目ハゼ科に属す。一見、カジカを小型にした、この近縁種のように見えるが、系統的にはかなり遠縁のハゼの親類なのである。これには近似種が多く、またこの種の中にも環境による変異型が多くて紛らわしい。原色日本淡水魚類図鑑には、*Rinogotius brunneus* (T.et S.)

の学名をとり上げて、更に16もの別の学名を列記してあるのが目を引く。テミングとシュレーゲルによるこの命名は、「ハゼの鼻をした」の意から



ヨシノボリ (静)

であろうか。頭部のこの特長のほかには、左右の腹びれが合わさって吸盤状になり吸盤として働くことである。

手持ちの書籍類には、ヨシノボリの語源にふれたものが見当たらない。ただ国語大辞典に「葦のぼり」とあるのが見つかった。生徒からよくヨシとアシの区別を聞かれて、「人のよしあしは言わぬがよい様に、草にもよしあしを言わぬことにしよう」などと洒落たりしたものだ。葦(よし)は蘆(芦・あし)とも書き、また同名異訓ともいえよう。それは曾て葦(あし)と呼ばれたものが、悪しに通ずるのを嫌って、(よし)と呼ぶ様になったという。これで葦はよしとしても、ヨシノボリの語源について愚考を加えざるを得なくなった。ヨシノボリはカジカ同様清澄な瀬を好むが、小型魚なためかカジカよりは多少瀬脇や浅瀬に棲みわけている。これが水出の時はカジカ同様、苦手の泥水に押し流される。辛うじて踏み止まるところは、流速も弱まったアシなどの生えたところであろうか。アシは泥水に押し流されてもなお、水流に抗して泥底から浮上しようとしている。ヨシノボリは藁にでもすがるように、特有の吸盤でアシに吸い付くと推理する。ここで彼は濁りの澄むのを水面に近い位置で待機する。本来底棲のヨシノボリが、泥水から起き直ろうとするアシの茎に吸い付いた姿は、アシの茎を登ってきたと見立てられても無理はなかろう。これが湖沼型のものになると、推理は簡単になる。河川の濁り水や強風による波浪などで湖が濁った時には、アシの茎を伝わり上ってくるのであろう。あるいは、浮上して茎の上部に吸着した様かそのように見立てられたのであろう。

なお、推理後に見つけたが、同図鑑で「湖沼型では、吸盤の長さが幅

よりも大きいことがある」の記述も、この推理を保証しようとも妨げるものではないと思う。愚考の責任上、最近琵琶湖まで確認に行ったが、風波が強く汚濁がひどくて無駄足に終わった。

さて、高知・山陽・近畿・北陸方面では、ヨシノボリ・ハゼ・ダボハゼ・カジカなどをひっくるめてゴリと呼ぶようだ。これはゴリの語源になるかどうか、壱岐・対馬・宮崎方面では、水底の細かいごみくずなどの方言のようだ。これから見ると魚のゴリも、細かくて食品価値も低く見られてのこととも思われる。

強引なことをする「ゴリ押し」は、これらの魚の漁法からきているようだ。国語大辞典には、日本海産名産図絵という書物からおおよそ次の様に説明している。

「数人の相手仕事で、まず川底に敷いた藁の上に小石を幾つも載せる。川下から三尺余の撞木で川底をこすって押し上げる。魚は藁上の小石の下に隠れる。この藁を小石ごと引き上げてから、魚を拾う」とある。

撞木（鐘撞き棒）とは、T字形に柄をつけた厚板でも使ったものか。魚が撞木の下をかいくぐって逆方向へ逃げないように、川底の小石もごみも一緒に押しあげるほどの強引さで押したにちがいない。また小魚も石もごみくずも、一緒くたに扱うところで、強引さの意味を一層強めているようだ。話が相前後したようだ。

生態的には①沿海にのみの海に棲むもの、②河川と海とを回遊するもの、③河川と湖沼とを回遊するもの、④湖沼のみに棲むもの、⑤河川のみに棲むもの、など様々である。

湖沼型や回遊型は卵が小型で、河川型は比較的大型卵で、卵数は少ないという。伊那付近のものが河川型で、大型少数卵であることは、孵化率の高いことに繋がりがあるのだろうか。とにかく、産卵習性がカジカと同様に扁平で露出した石の下面に産みつけられ、♂親に保護されることである。また両者とも、河川型では孵化したときに既にひれが見え、活動的で成魚率も高いと見てよかろうか。両者間での違いは、カジカは卵



塊で、ヨシノボリは一層に産みつけられることだ。またカジカ卵は卵円形だが、ヨシノボリ卵は長紡錘形なことぐらいだと思う。

改めて言うまでもなく、生物は環境に対して、つねに調和し適応している。この適応現象がもとになって、生物の多様性と類似性という、一見相反するような現象が見られる。系統的に同一種であるヨシノボリが河川・湖沼・海という異なった環境下では、それぞれ河川型・湖沼型・沿海型という体型的な特徴や生活型や、大型卵・小型卵などの多様化が起きる。このような傾向は小規模ながら、適応放散と呼ばれる現象の一例と言えなくもない。

また一方では、同じ魚類とは言え、カジカとヨシノボリはカジカ目とスズキ目というかなり遠縁関係の魚である。この河川型の2種が同一環境に適応した結果は、体型や産卵習性に見られるような類似性を示している。このような現象を適応収斂（集中）と呼ぶが、その身近な一例とも言えようか。

昔、この辺りではヨシノボリのことをヨナと呼んだ。カジカの「よな」小魚の意からかどうか、ヨナッコとも呼んだ。ヨナは夏も昼間も浅瀬の小石の下に静止していた。子供達のうろ掴み練習にはヨナッコが丁度手頃であった。

川干しは、鉤・銚などの鉄製漁具や繊維性の糸・網などのない時代からの、もっとも原始的な漁法と言われている。これが大正年代までプロ・セミプロ級の手で名残りをとどめていた。法規制はいつ頃からか、恐らく潜（もぐ）りだったにちがいない。私たちも小枝川を素手や帽子などで運んだ砂で干してはヨナをとった。小学校 5、6 年頃には、近所の若者たちの仲間に加わり、小枝川の川干しをやった。浮き魚（オイカワ・ウグイなど）は、堰き止めの途中で上流や下流へ逃げてしまうが、細砂を箕で運んでよく干すと、浮き魚の仔やヨナ・スナハギ（シマドジョウ）が、小さな釜に沢山入った。真夏に山沢（溪流）の水が枯れてくると、この川干しも楽しかった。だがすばしっこいヤマメはいち早く逃げてし

まって、小物だけしか残っていなかった。水漏れの間隙へ落の葉や苔など詰めても、結局は逃げ遅れた小物やカジカをうろ掴みすることになった。ヨシノボリは溪流の口もとまでで、それ以上は遡上していなかった。

川干しのもとには更に原始的な搔掘り（かいぼり）漁法の変形として行なわれてきたようだ。寄せ際の浅溝ではこのかいぼりで泥んこになってフナ・モロコ・ドジョウなどをとったこともある。寒中に2、3歳年上の仲間とやったこともある。新宅で昔話になると、寒さで口もきけぬほどになった泥まみれの私が、裏口から震えながら炉端に這い込んできた、と言うのだが、多分そのときのことであったろうか。

## 22. ざざむし

誰でも天竜川の川虫といえば、まず頭に浮かぶのはザザムシであろう。「ザザ」はざんざ節のざんざと同様水の速く流れる状態で、また「ザザ」には笹と同様細かい意もあるようだ。国語辞典には「ざざむし」として「川の流水に棲むカワゲラ・カゲロウの幼虫などで、伊那地方ではこれを佃煮にして賞味する」と出ている。



ヘビトンボ  
(孫太郎虫)

この辺では昔から年中行事のように秋の取入れも終ろうとする頃、井浚いのための川干しがあり、また堤防工事などにも人足の都合でか、秋にはよく川干しがあった。井は農業用灌漑水路で、浚うのは増水の度に本流から流れ込んだり水路壁から崩れ落ちた土砂が対象であった。このようなときには近隣の女子供までがこぞって「陸拾（おかびろ）い」という一種の漁（いさり）に出かけた。それぞれの者が古いめんぱ（木製曲げ物の弁当箱）や片手桶・小桶・古陸持（おかもち）・バケツと思いおもいの容器に干上がった川にうろたえている雑魚や虫を拾い込むのである。一番逃げ足の早いのがザザムシの元祖カワゲラの幼虫で、佃煮のように煮しめると味は最高のものである。これは川

干しの前は流れの一番早い瀬であった辺りで、不安定な礫は片手で転がすことができ、逃げ出そうとするのを手早く容器に拾い込むのである。

この虫は系統上では積翅目のカワゲラ科カワゲラ属に分類されている。幼虫は肉食性で、自分のからだの大きさほどの他の昆虫を食う豪の者である。これが不完全変態で成長し、晩春から初夏にかけて水面に露出した石の上に這い上って羽化する。

天竜河原に近い私の家では、この幼虫が灯火に飛んでくるのも珍しいことではなかった。むずかしい積翅目の学名の Plecoptera のPlecoが積(たたむ) Pteraが(翅)の直訳のようである。翅のたたみ方だけでは直翅目昆虫のごきぶり・かまきりなどに似た感じである。

瀬の巨礫のうち、まわりが大礫・中礫で半ば埋まったようなのを両手で引き起こしてみると、マゴタロウムシがぺこんぺこんと体をくねらせていることがある。これはまたカワゲラの数倍の豪傑で、脈翅目・蜉蝣(かげろう)目または自分と同系統の脈翅目幼虫のやごなどを食べて育ったもので、へたをすると指に噛みつかれる。それを警戒してか女性の多くは真魚箸(まなばし)などを巧みに使って能率的に拾うのである。マゴタロウムシはヘビトンボの幼虫で、トンボ類の脈翅目昆虫は完全変態だが、マゴタロウムシも2~3年かかって老熟したものが陸上に這上がり、石の下や倒木の下などに潜って蛹化し、初夏の頃より羽化するとされている。私は幼虫時代の面影をよく残したこの成虫、即ちヘビトンボはしばしば見かけたが、蛹は見たことがない。この幼虫であるマゴタロウムシが子供の疳の薬即ち一種の強壯薬として貴重品扱いされているというが、良薬で口にうまいものの筆頭であろう。マゴタ(愛称)のいるような石には、ときには「アカザ」別名緋鯰(ひなまず)がいることがある。背鰭や胸鰭の毒針で刺すので、この辺では「サスリ」と呼んでいたが、強く刺されると血が出るほどで蜂に刺されたほどの痛みを感じず。

淵の部分は完全に干上がらず池になり、ここは鰻・鯰・鯉・鮒・ウグイ・カマツカ・オイカワなどが逃げ込み、投網やうろづかみの者の縄張

りになる。次の瀬頭になる部分から瀬にかけては石もやや小型になり大礫中礫が多くなる。ここにも前述のザザムシやマゴタロウムシもいるが、アオムシの好適な拾い場になる。つまり川干し前の状態での生息場となっている。アオムシは頭部以外の全体が濃緑色をしているためついた名であろうが、松本方面では頭部の格好から玄能虫と呼ぶそうである。アオムシは系統上では毛翅目・ヒゲナガカワトビケラ科に属するヒゲナガカワトビケラの幼虫である。幼虫の食性は前兩者とちがってほしい植物食といわれている。このアオムシは自分の吐いた糸で中礫や大礫にくっつけて細礫を綴り合わせた精粗いろいろな巣をつくっている。これは本当は繭で虫が若いほど繭は粗雑だが、老熟につれて細礫を綴った繭は次第に精巧なものに完成される。しかし蚕でいえば、ちょうど柴つき繭のように、中礫または大礫つき繭となる。すなわち、完成された繭は固くて中礫または大礫にしっかりとくっついていて壊しにくい、中を調べて見ると淡緑色の弱々しい蛹が入っている。成虫は幼虫時代の面影はほとんど残していないが、触角が長く左右の翅が山形に体を挟んで前縁部が下垂している。羽化は冬を除いて一年中行なわれているようで、これもよく灯火へ飛んでくる。

アオムシを釣餌にする場合を考えると、絹糸腺の未発達な若齢幼虫の方に、ウグイもオイカワも食指を示すようだが、後述のチラカゲロウやヒラタカゲロウには遠く及ばない。初秋から晩秋にかけての三年魚ぐらい以後の大型のウグイは、越冬のエネルギーを蓄えるためか、大小のみさかきもなく大きなアオムシにでも飛びつく。釣餌のことになれば昔はオイカワやウグイの釣餌として、チラが最高のものだった。これは蜉蝣目・チラカゲロウ科・チラカゲロウ属のもので、チラカゲロウの和名は伊那地方で呼ぶチラの名からつけられたようである。実際どんなにわずかでも水さえあれば、その中をチラチラとチラツキ泳いで、とらえにくい虫である。浅瀬を好んで棲み、流れてきた藁やごみや草の絡んだ中に密集していることが多い。察するにこの中で繁殖する微小生物または腐

敗過程の藁や草の有機物をも餌としているのだろうか。これを釣餌として取るのは至極簡単で、目の細かい篩（ふるい）か金網の笊（ざる）を、浅瀬の浮石などに絡んでいる藁や草などのごみの下にあてがってゆさぶると、一掬（ひとすく）いに何十匹というほどもとれたものである。このチラの小さくて若いうちは淡い赤褐色で、私たちはこれを赤チラと呼んだ。この餌なら2～3年魚ぐらいまでのウグイは面白いほどよく釣れたし、オイカワもよく釣れた。これが段々赤味が濃くなり黒ずんでくると釣れ方は遠くなるが大型のものが釣れた。さらに老熟して真っ黒になり羽化に近づいたものを黒チラと呼んだ。オイカワ釣りの場合は黒チラ餌では、ガゴとか黒口（くろくち）と呼ばれるやつぐらいしか食いつかなかった。この魚は生殖腺ホルモンのはたらきで雄の体色が婚姻色という鮮やかな色彩に変色したもので、色彩とは逆に味は最低のものだ。したがって、クロチラは後回しにされて餌箱に残されているうちに、餌箱の縁で羽化して飛び立ち露命を繋ぐものもある。チラカゲロウは人家にもよく飛んでくるが、これに近縁のカゲロウが短命の形容に使われるように、成虫期間は短いようである。

蜉蝣目の学名 Ephemeroptera の Ephemero は一日だけ生きる意味からで、ドイツ名の Eintagsfliegen も同様、一日だけ飛翔する意である。

さてこのチラが天竜川では終戦前後から急激に減少した、というよりほとんど姿を消し、三峰川にわずかに痕跡的に残っていた程度で、その後絶滅したものと思っていた。ところがつい最近、友人の「大変懐かしいものに逢った」との言葉に何かと思ったら、釣餌取り中に思いがけず数匹のチラが取れたが、惜しくてなかなか餌に使えなかったとのことであった。三峰川合流点付近といえば、やはり三峰川にわずかに命脈を保っていたものか、それにしても天竜川の水が多少でも浄化の方向へ向いてきたのかと、釣とは別に互いによるこびあった次第である。

次にヒラタカゲロウの幼虫だが、チラが円筒形で瀬脇の砂や細礫の溜らぬ程度の比較的緩流域に適應しているのに対し、この幼虫は体型が名

のごとく極めて扁平でかなりの急流域に適應して、大礫や巨礫の表面に張り付いていて、流れてくる藻類や礫面の水垢（あか）即ち藍藻や珪藻を食べていると思われる。外敵が近付くと速やかに礫の下側に身をひそめる。中礫以上の平たいものに一層多いが、これを川底から持ち上げて裏返すと、少しでも凹んだところにいくつも張り付くようにしている。

ここで『上伊那誌自然編』補説中、信州大学鳥居教授の「天竜川のザザムシ」の報告の中の「市販のザザムシ」にカゲロウ類の幼虫が皆無であったことに関して、私の愚考を加えることをお許し願う。

1957年といえば既にチラは激減していたこと、また市販のザザムシは、冬季プロ級のザザムシ漁師の四手網漁によるもので、多くの幼虫が秋までに羽化してしまっている。またチラは瀬脇の浅瀬に適應しているのに、ザザムシとりの漁場はかなりの水深の瀬頭から瀬にかけての、アオムシ、ザザムシの適應域であること。もしヒラタカゲロウの適應域にかかったとしても、彼は比較的礫から離れにくい点などが考えられるが、如何なものだろうか。この属のものは溪流に多く、ヤマメ、イワナの釣餌にもよく使われる。

天竜川でも秋になってアユがいなくなると、大きなヤマメは溪流から下ってきていて翌春6月一杯、ときには7月上旬頃までいて、ウグイ・オイカワの釣餌のヒラタカゲロウに食い付いていて慌てたことがよくあった。この虫は一見ひよわに見えるが、汚染には案外強くチラが消えてからも比較的最近（1955年頃）まではチラの代理をつとめてくれた。しかしこの虫がチラなどと較べて急流域を好むのは、呼吸に酸素量を多く必要とすることと無関係ではなからう。

（注）地学上では礫をその直径の長さで細礫（0.2～0.4cm）・中礫（0.4～6.4cm）・大礫（6.4～25.5cm）・巨礫（25.6cm以上）として分けているが、およそこの見当を頭において分けた。

## おわりに

参考書類は文中に記すよう心掛けたが、宮地伝三郎先生の「淡水の生物誌」（朝日新聞社）・「アユの話」（岩波新書）をここに追加して、既に読まれた方にも、もう一読をお勧めします。

さて、近ごろ流行の「自然保護」という語には、人間の思い上がりが感ぜられて、私は好きでない。だが、敗戦後否な戦前から、物欲のみに追われ続けた私たちの心に、自然畏敬の素朴な信仰を取り戻したい。

それにつけても最近流行のリゾート開発は、自然破壊につながる一大関心事否な大寒心事である。例えば、一見自然が保たれているかのように見えるゴルフ場でさえも、その芝生の環境保全機能は森林のそれとは比較にならない微弱なもので、ほとんど零に近いという。のみならず、芝生培養・保護のために使う化学肥料・殺虫剤・除草剤等は、水質汚染の大きな問題になっている。

Ecologist といえば生態学者の意であるが、欧米ではかなり以前から、自然環境と、人間はもちろんすべての生物との関わりあいを重視する人々を含めるようになったという。さらに、従来経済優先であった政治を自然環境保護優先の政治に変えようとする大きな政治運動に発展してきており、これらに関わるすべての人々を Ecologistと呼ぶようになってきているという。

日本でも、水質汚染問題が社会の全般に浸透した今日、いまだに産業排水や生活排水の処理が表面的・形式的に終わっているものが多いのは残念である。

これらの排水処理が良心的・本質的なものになるためには、社会全般がいわゆる Ecologistになって、うるさく騒ぎ立てるべきではなかろうか。

伊那市でも、漸く下水道・浄化処理施設の具体策が進んでいるというが、100年・200年先を見越したしっかりしたものにしてほしい。

天竜川が周囲の山々の豊かな森林に護られて静かに流れ、河床には影をひそめていたカジカやヨシノボリ・カマツカなどが、また川原の淀みにはメダカ・モロッコ・フナッコなどの姿が見られるようになってほしい。天竜川での水浴びが昔ばなしでなくなることも。

この稿は郷土研究誌「伊那路」に掲載されたもの（昭和52～59年）をもとに加筆したものである。転載をお許し下さった「伊那路」編集部の皆さんに心から謝意を表します。

（この稿の校正中に宮地先生の訃報を知りました。謹んでご冥福をお祈りします。）



**橋爪壽門** (はしづめ としと)

大正3年 伊那市西春近沢渡に生れる。  
東京農業大学専門部農学科卒  
長野県内高校教師勤務  
伊那市社会教育委員3期服務

プランクトンの写真集の夢がある。

---

**天竜川の魚や虫たち**

---

昭和64年1月6日 発行  
平成3年3月31日 第2刷

企画発行	建設省中部地方建設局 天竜川上流工事事務所	長野県駒ヶ根市上穂南7-10 〒399-41 ☎0265-82-3251
著者	橋爪壽門	長野県伊那市西春近5079 〒399-44 ☎0265-78-4689
編集	(有)北原技術事務所	長野県南安曇郡豊科町高家5279 〒399-82 ☎0263-72-6061
印刷	双葉印刷(有)	長野県松本市城東2-2-6 〒390 ☎0263-32-2263

---

表紙：レザック・つむぎ(こうぞ) 本文：書籍用紙70kg 本文：10ポ

## 「語りつぐ天竜川」の発行にあたって

天竜川は独特の河川形態をもつ河川です。上流部は諏訪湖が洪水を調整して比較的穏やかな表情をしています。多雨域を後背地にもつ三峰川、小渋川、太田切川などの支川を合流するたびに、洪水とともに大量に土砂を受け入れて一気に急流土砂河川の様相を呈し、途中多くの狭窄部の間に氾濫原を形成してきています。

一方この氾濫原は伊那谷の穀倉地帯でもあり、地先の人々は出水の度に氾濫する天竜川との間に涙ぐましい闘いを繰り返してきました。

この天竜川の氾濫を鎮め水を高度に利用するための地元の長い営為の後を受けて、昭和12年から砂防を、昭和22年から河川を国が直轄事業として取り組むようになり、それぞれ50年及び40年を経過しました。その間、地域の皆様から絶大なるご協力を賜り、以前と比べると天竜川の安全性は格段に向上いたしました。

しかし安心は出来ません。絶えず流域の変貌をみつめて、河川施設の整備運用や維持管理を図っていかねばなりません。

また、天竜川は地域の人々の情操のうえでも深い関わりがあり、独特の風土や文化を育んでまいりました。河川を危険なものとして遠ざけたり、水があるからといって過度に取水してしまっってはなりません。治水利水について一応の成果をみた現在、地域にとって望ましい天竜川の姿を考え実現していくことがこれからの課題であると思います。

私たちは、天竜川流域の自然立地・生態及び人びととの係わりなどについてより深く理解するよう努め、より知恵のあるものに仕上げたいと考えるものであります。

「語りつぐ天竜川」は以上の趣旨に基づいて、天竜川の治水に関する地域の経験や知見を収集周知し広く地域共通の知識とすることにより、よりよい天竜川を築いていきたいと考え発行するものです。

なお、ご執筆いただいた方々には、自由な立場でお考えを披瀝していただいたため、建設省としての見解とはならない場合があることを付言いたします。

今後とも天竜川の治水について皆様のご指導ご鞭撻をお願いいたします。

建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所  
所長 清治 真人

## 「語りつぐ天竜川」目録

- |                             |         |
|-----------------------------|---------|
| 1. 伊那谷の気象                   | 米山 啓一著  |
| 2. 天竜川上流域の立地と災害             | 北沢 秋司著  |
| 3. 天竜川に於ける河川計画の歩み           | 鈴木 徳行著  |
| 4. 総合治水の思想                  | 上條 宏之著  |
| 5. 総合治水と森林と                 | 中野 秀章著  |
| 6. 伊久間地先に於ける天竜川の変遷          | 松澤 武著   |
| 7. 天竜峡で見た天竜川水位の変遷           | 今村 真直著  |
| 8. 村境は不思議だ                  | 平沢 清人著  |
| 9. 諏訪湖の富栄養化と生物群集の変遷         | 倉沢 秀夫著  |
| 10. 諏訪湖の御神渡り                | 米山 啓一著  |
| 11. 理兵衛堤防                   | 下平 元護著  |
| 12. 近世 天竜川の治水 - 伊那郡松島村 -    | 市川 脩三著  |
| 13. 川筋の変遷 - 天竜川と三峰川の場合 -    | 唐沢 和雄著  |
| 14. 伊那谷山岳部の降雨特性             | 宮崎 敏孝著  |
| 15. 天竜川の橋                   | 日下部新一著  |
| 16. 伊東伝兵衛と伝兵衛五井             | 北原 優美編  |
| 17. 天竜川の魚や虫たち               | 橋爪 寿門著  |
| 18. 天竜川のホタル                 | 勝野 重美著  |
| 19. 天竜川流域の村々                | 松澤 武著   |
| 20. 小渋川水系に生きる - 人と水と土と木と -  | 中村 寿人著  |
| 21. ものがたり 理兵衛堤防             | 森岡 忠一著  |
| 22. 量地指南に見る 江戸時代中期の測量術      | 吉澤 孝和著  |
| 23. 土木技術と生物工学 - 生きものを扱う技術 - | 亀山 章著   |
| 24. 戦国時代の天竜川                | 笹本 正治著  |
| 25. 天竜川の水運                  | 日下部新一著  |
| 26. 惣兵衛川除                   | 市村 威人著  |
| 27. 紙芝居 開墾堤防 - 下伊那郡豊丘村伴野 -  | 竹村 浪の人著 |
| 28. 昭和36年伊那谷大水害の気象          | 奥田 穰著   |

(以上既刊)